アラン

ーノルマンディー人のプロポー（中）

翻訳 高村昌憲

八十一　ナイフは何故切れるの？
八十二　宵の明星
八十三　潮
八十四　小学校教師ブノワ氏
八十五　（子供の教育）
八十六　自惚れ屋の歴史家
八十七　（歴史教育）
八十八　七面鳥学校
八十九　特別数学クラスの生徒
九十　理工科学校の学生たち

九十一　エヴァリスト・ガロワ
九十二　歴史家の精神
九十三　（科学の勉強）
九十四　ギリシア語への愛
九十五　文化
九十六　内部統治
九十七　（本当の勇者）
九十八　社会道徳
九十九　互いに愛し合いなさい
百　道徳・危険なもの

百一　（自由な判断力）
百二　カリクレス
百三　権利と力
百四　（正義と力）
百五　（事実の見方）
百六　理性的道徳
百七　治安と公平
百八　平等
百九　観念としての平等
百十　（平等の権利）

百十一　（社会主義者の革命）
百十二　（復讐）
百十三　死刑
百十四　乗船客たち
百十五　社会と個人

百十六　死者は統治する
百十七　伝統主義
百十八　自然の連帯
百十九　ストライキ
百二十　（愛と宗教）

百二十一　書く自由は、絶対的か？
百二十二　（表面的自由）
百二十三　エスペラント語、イドー語
百二十四　スゼットとデデ
百二十五　（男と女の歴史）
百二十六　一夫一婦制
百二十七　結婚
百二十八　中国紅茶夫人
百二十九　（道具と観念）
百三十　経済革命

アランが眠るペール・ラシェーズ墓地（パリ２０区）

八十一　ナイフは何故切れるの？ (POURQUOI LE COUTEAU COUPE-T-IL)

幼い子供が尋ねました。「テーブルのナイフは何故切れるの？　何故僕の指では切れないの？」。人は肩をすくめるかもしれません。そして、子供は直ぐにものを尋ねる癖があるものだと言うかもしれません。この質問は常識的にも愚かであると疑う余地はありません。しかし、この質問が本質的にも愚かであるなら、先ず最初に懐疑する理性がそんなにも極端に間違っていないと、あなたは理解するでしょうか。私はそのメカニズムを審美眼的に、そして自由に子供たちに教えました。ところが私は々、熟考のときの最初の考えはびっくりするような滑稽さを生んでいたことを観察しました。そして、学問としての歴史にもびっくりするような愚行をやっていないでしょうか。

それ故、この質問はそんなにも悪い質問ではないとその子供にも分かることでしょう。そして、私の指は鉄よりも硬くなく、ナイフはその形状を決して変えず、木材の上では潰れないことが指摘出来ます。しかし反対に私の指は、もしも板の上で何らかの強い圧力がかかれば直ぐにぺちゃんこになるでしょう。それ故に鉄で出来た指と、鉄のナイフを比較すべきだろうと思います。子供が考えたことは正しいと私は思います。そして子供の質問は最早、そんなにも愚かなものではありません。

それ故、考えの対象を変えてみましょう。何か重い物を一カ所で持ち上げることにしてみましょう。重い物を床から離して持ち上げるのは難しく、その物の一カ所が持ち上げる助けになることは、考えてみれば明白です。その一カ所と子供が言うナイフとが類似していることも明白です。しかし、一カ所とは何を意味するのでしょうか？　それは一つの傾斜です。その一カ所を穴に打ち込むことで、重い対象物は斜めに傾斜して立ち上がっていきます。道が傾斜していることと一カ所の傾斜を比べても、未だその類似を理解するには難しいです、何故なら、道は不動ですが、それに反して一カ所は動くからです。同様に、私は或る長い木材の一カ所を手にとって傾斜している道のようにすれば、上に乗っている小さな車は回転していきますが、それが良い例です。もしも私がその車を押せば、木材の一カ所に固定された儘で車は登っていくことでしょう。しかし、木材の一カ所を押しても車は固定された儘なら動きませんが、そうでなければ再び登っていくことも明白です。込み入った複雑なことを言っているのではありません。車は絶対に固定されませんから、登っていくことになります。しかし、あなたは二本の手があれば、言葉がなくても経験によって大変明瞭に分かるでしょうし、子供はそこから重要な考えを持つことになるでしょう。

重い荷物を持ち上げる機械のように、私たちは今、重荷を上げ下ろしするための傾斜を考えてみました。そして、私は次の問題を提示します。傾いた道を車が一キロメートル行った後、二メートルの高さを上がることは出来ますが、一本のロープを引っ張って垂直に上げることも簡単でしょうか。簡単ではないと直ぐに分かります。試してみることも出来ます。二五〇グラムの小さな車でも垂直と一キロメートルと、その重さの違いを指にかかる重さで感じることは出来るでしょう。その傾斜を色々と変えてみるなら、子供は推測することが出来て、奥深い理論に近づきます。そして、その道はあちらこちらにあります。何故なら二メートルもない高さであっても、その道を上がることは馬にも大変な労苦であることを誰でも知っているからです。その高さを引き上げるのは、大変なことであることを知っています。それらの考えから、より大きな明晰さに導くことだけが問題なのです。

向こう側の遠い方を押すことがなければ、傾斜が多少なりとも急になるのに従って、多少なりとも押すのが困難になる一カ所の話に戻ります。ナイフというものは一カ所の部分しかないものであり、傾斜を生む木材の部分からは区別されて離して使われます。ナイフの一カ所は緩やかな傾斜になっています。そこで釘について話しますが、それも一カ所の部分であり、釘を打つ点はあらゆる側面の中の一つの傾斜でしかありません。この類似は単に子供が考えるために良いだけでなく、いい加減な粗野な精神の持ち主でも決

定的な間違いに気付くことになるでしょう。私には分析しないでも分かります。それというのも、釘が木材の中に入って行くには、木材よりも硬いからであると言えば良く、極めて当たり前に思うでしょう。それは「眠気を誘う退屈な効き目」に過ぎないのでしょうが、多くの人々は気にも留めません。義務のように気を付けて見る人は僅かです。

（一九一一年四月十六日）

八十二　宵の明星（VNUS AU COUCHANT）

この頃は、日が沈むと金星が見えます。殆ど真南に見える同時刻にシリウスの上方、そしてオリオン座の左下の方に光輝くこの金星の光に気付かないのは、子供ばかりではありません。眼を覚まして起きている知識人は一体何を勉強しているのでしょうか。シリウスはその間に、あらゆる星々の間を旅しています。毎年同じ季節にオリオン座に付いて来るように見えるのは、昴です。そして、全ての星々が同じように動き、少しずつ太陽を取り戻して行きます。一月の夜九時にシリウスはまだ大空に見えますが、三月の同時刻にはもう西の空の方へ下がっています。五月には西の地平線の下です。一年を通して季節が来ると繰り返します。

しかし、金星はもっと気まぐれな天体です。昨年のこの季節には沈んでいて見ることが出来ませんでした。その代わりに金星と同じ明るさで輝く別の星が、太陽が昇る前に東の空に見えました。別の星と私は言いました。何故なら古代人たちは、暁の明星と宵の明星は二つの別の星だと信じていたからです。そして、子供が先ず二つの星の様子を観察して、別の星なのか暫く疑問を持った儘いました。二つの星は同じ季節には決して大空に現れないのに気付きます。あなたが何年もかかって観察して、そのことを立証したならば、暁の明星が太陽から遠くにあり、だんだんと近づいて来ると、明け方の明るさの中に消えて仕舞い、その消失後に何時も宵の明星を再び眼にするのであり、それは先ず太陽の傍にあって光輝き、次にお互いに接近して、多分二つの星は一つでしかないという考えを子供は持つようになるでしょう。私は別の機会にその観察を他の人間に長くやらせて完全なものにしたかったのですが、それに反してその仕事は表面的なものを解釈する判断力の研究へ行かせたかったのです。というのも他人の眼で何かを見ても、不都合なことは何もないことがあり得るからです。自分自身で考えなければなりません。さもないと愚か者になります。

ですから子供は宇宙形態説を内面に作り上げ、金星が往復運動をして太陽を横切っていると理解しようとして欲しいのです。その次に長い時間をかけて自分の創意工夫によって月は地球の回りを回っていて、地球も太陽の回りを回っていることをよく認識するようになるなら、金星も太陽の回りを回っていて、金星の往復運動は遠近法による錯覚だと気付くことでしょう。私は自転車の車輪の縁に紙切れを貼り付けて、その運動の動きを子供に解らせようとします。しかし、そんなことをして私は何を発見するのでしょうか。誰がそんなことをして物事を考えるのでしょうか。子供は歴史を教えて貰いますが、一年というものは何であるかを知らないばかりで、カレンダーを知っているだけです。

（一九一一年三月十二日）

八十三　潮（LA MARE）

ディエップとかル・アーブルの子供にとって、海水の潮は週の曜日が繰り返すのと同じように馴染みがあります。もしも私が、泥水の中を歩いて蟹を捕るこの小さな町の子供たちを教育しなければいけなかったならば、潮が満ちたり引いたりする周期を観察して、計算問題を沢山やらせると思います。

「十日間で潮は何回満ちるでしょうか？」

直接観察することが、問題のデータを与えることになります、そして答えを吟味することにもなりますが、それは々忘れられることであり、その上何時も簡単なことではなく、例えば表面的であったり、混ざり物で純粋なデータでなかったりします。しかしながら計算と体験が合致すると、最も深い眠りについたような時でも期待とうっとりした恍惚が何時も生まれます。そこから最も単純な物事においてさえ、数学的能力が敏感になり優れてきます。計算に情熱を持つことは、興味を引く方法にもなります。もしもこのことを考えるなら、莫大な利益を得ることになります。何故なら体験はそれだけであるなら非常に容易であり、計算もそれだけであるなら大変に退屈であるからです。

船乗りの息子たちは空模様の観察に慣れてきて、月の満ち欠けの位相や時間が少しずつ違ってきているのを何時も知るようになるのも不可能ではありません。そこから私は黄昏とか満月が重なる美しい日々の繰り返しについても問題を提示することになるでしょう。ところで確実に気付いてくれることは、潮は月の動きに合わせて絶対に日々起きるということです。潮は太陽よりも一日に五〇分遅くなりますが、月の出も同じです。その結果、月の位相が上げ潮や引き潮を引き起こすと同時に、特定の場所では月の高さは何時も満潮の時間に一致します。これらのことはだんだんと分かってきたことですが、計算による予報の訓練をしなくても、考えることなく潮を利用します。雲や眼に見えない新月であろうと、空に線を引くことは紙上の問題です。眼に見えない月を探し出すのは数学的法則の援助があるからです。しかし、間違いはケプラーやコペルニクスやニュートンでなければならないと信じ込むことです。週単位や月単位の周期は全てが数学上の法則であり、そのようなことは小学校でやることが出来ますし、既に十分に行われています。そして、そこから天文学者たちが育っていきました。

大変に単純なこれらの方法によって月と潮の関連が明らかになってきました。既に極めて弱い兆候ですが、そのような関連を行っているのは本能そのものであり、迷信もそれに似ています。そして、生徒たちが太陰月と潮の関係が何時も変わらないと書く能力があったならば、私は大いに自慢したいと思います。何故なら理論を構築しなければならないことを望むようになれば、それは第一歩目の試行になるからです。距離があるのに一方の天体と他方の天体がお互いに影響して微妙な働きを与える外の例を私は知りません。もしも地中海がこの概念に当て嵌まらず、技術者たちもその様に考えなかったとしたなら、恐らく海の潮を間違って理解することになるでしょう。

（一九一二年六月三日）

八十四　小学校教師ブノワ氏（MONSIEUR BENOIT, INSTITUTEUR ）

小学生たちは川岸の水辺に降りました。そこで引き返す時間が来るまで待ちます。波と渦と浮いた木片、小舟、岸辺の思い出で一杯です。セーヌの流れを止められても、小学生たちの思い出という観念の流れを止めることは出来ません。先程まで勉強していましたが、今はのんびりしています。

しかし、ブノワ先生はやり方が上手で誠実な人です。彼は水辺にいる時も同じでした。先生も又漂流物を見る如く自分の観念の流れを見ています。そして、全てのイマージュが心をんだように見えますが、小学生並みではありませんでした。黒板で教えるのは決まりきったことであり、賢明な子供の問題や歴史は覆われたように見えなくなるか、縺れた儘になっていて哀れなイマージュになって、何も引っ掛かりません。ブノワ氏はそんなにびっくりしませんでした。生き生きとした知覚能力は、女王のように知性的で美しい思考になり、一段と感動的になるのを彼は々気付いていました。そうです、それ故に杭の回りで草を食べる山羊のように、自分が考えた思考に沿って働こうと彼は思っています。見てみることです、それが河の流れをきちんと描写することになるのです。水の流れは至る所で全てが同じ速さで流れているでしょうか？　いいえ、同じでないのは明白です。河の中央辺りの流れは、矢のように列になって速く流れています。それは何故でしょうか？

ここで河の流れと比較するものがあるとすれば何でしょうか？　多分、列車から降りて出口へ殺到する人の群れです。一番速く行く人たちはどんな人たちでしょうか？　何によってそうなっているのでしょうか？　接触や衝突は何処で起きているでしょうか？　出口に向かって歩く人に接触することと、壁に接触するっことと同じでしょうか？　河の流れを思い出してみましょう。突進するように流れる水の流れそのものを想像してみましょう。最早、目的地に到着したいという望みで流れているのではなくて、重さによって流れているのであり、斜面を転がり降りるようなものです。ここに鉛の粒玉があります。それらを転がせてみましょう。何処から脱出するのが一番良いのでしょうか？

ところで自分自身が回転しているようなこともないのでしょうか？　群衆の中には前進しないで自分自身が回転している人たちがいないのでしょうか？　いるのです。彼らは壁に接触しています。車輪が回るように壁側で回っています。それでは所々で水が回転しているのを見たことがある人はいませんか？　そうです、渦巻です。どんな風になっていたのでしょうか？　漏斗の穴のようです。何故そうなるのでしょうか？　回転するのはどんな意味があるのでしょうか？　あなたはそんなことを思いもしなかったのではありませんか？　明日の宿題を書いて下さい。あなたは橋から見た河の絵を描きます。橋脚やアーチも忘れないで描きます。同様にそこを流れる水も、最も速いように描き、次にその場所や流れる方向や渦巻が移動して行く様子も描きます。河を流れる漂流物を見て最高速度が秒速何メートルかを考えます。そして、最も速くてパリからル・アーブルまで何時間かかるか計算します。あなたは急行列車と比べます。それに乗って出発します。授業は終わりです。

ブノワ氏は両手を擦り合わせます。そして、教室の壁に貼り付けられているのと同じ〈時間割表〉に眼を落とします。それには次のように記されています。「算数は楽しく、道徳は一人ひとりに」。彼は楽しげに笑います。気を付けて下さい、ブノワさん。役所があなたを見ていますよ。

（一九一〇年二月十六日）

八十五　（子供の教育）

子供たちの多くは文章を書く前に構想を練ります。その構想は自然の感情を文字にしたもので、昔の人間が確かにそうであった自然なものです。只、構想を練る子供たちの素質だけは、一般的に人から教えて貰うようになるとなくなって仕舞います。そこには何か不思議なものがあります。

大変に理性的な老人にこのことを言いますと、次のように答えました。「そうです、大いに不思議です。そして、一種類だけではありません。子供は本質的に単に構想するだけでなく、科学や芸術のあらゆるものを身に付けます。しかし、教授たちは上手く処理しています」。

私は彼に言いました、「恐らく、上手く処理してデッサンとか言葉で表していた子供の下手な絵というものをきれいに消して仕舞わなければなりません。そして、要素や基本に戻ることよりももっと理性的なものは、幾何学の点や線、メカニズムの単純な力などです。この方法で子供は明晰な観念だけを形にしていきます。何事も先ず綴りをたどたどしく言ってから読まなければなりません」。

老人は言いました、「昔はその様な考えが私にもありました。この崇高な方法で何かの精神力を生んでいるのは確かですが、それは技術者とか建築家とかあるいは画家のためにあるローマの賞に引き継がれています。そうは言っても他人の考えで何時も思考したように、鸚鵡のように何時も他人の言葉を繰り返してばかりいないか、今でも私は余り自信がありません。しかし、他人の言葉で、この正しい方法で最初の誤解や混乱を放りっぱなしにしていないか、私は自問するのです。何故なら兵士や機関車のことを書く若い乱筆家は最早、型どおりのアカデミックなものを理解しなかったからです。そして、水に色をつけたり、火で遊んでばかりいた若い化学者は、化学の授業の時はあくびをしているだけです。もしも先生が書き方や化学そのものを教えないで子供の観点で見るようにしたならば、確かにそのようなことは起きません。それは若い頭脳の中で殴り合うような混乱した観念を抜け出て、だんだんと整理されて、取り替えることなく立て直して行きます」。

私はこの話を聞いて考えさせられました。ですから以前に私が見た子供の絵の展覧会は為になりました。平凡な生活の情景を思う儘に余すところなく自由に描いていましたが、美しくはありません。しかし、子供たちが内面で何を考えているかは発見出来ます。先生は脇で最早、大袈裟に言ったりしませんでした。少しでも教授たちが絵の先生を真似て、あらゆる面で生徒たちの間違いを上手に抜け出させたいと思うなら、多分それが教育なのだと思います。何故なら壺の中の水のように、観念の実体は決して精神から自ら流れて行くことがないからです。真実は私の間違いが立て直ったものでなければなりません。さもないと真実は、私の帽子や外套よりも、実際に自分のものでなくなって仕舞います。

（一九〇九年十月二九日）

八十六　自惚れ屋の歴史家（ALIBORON HISTORIEN）

自惚れ屋さん。上品な政治家モーリス・バレスは、小学校の先生をこの様に呼びます。言うのは易しいです。バレスが言いたいことをもっと考えなければなりません。確かに、絶対にあってはならないと彼が言うことは、先生が子供たちに読み方を教える能力が無いとか、算数を知らないとか、重さや長さの仕組みを知らないということです。その上に、争うということがあってはなりません。義務として教えると教育は大変に難しいものになります。フランスの教師たちは、児童の性格や地方の習慣に適応することを三十年前から手探りに考えてきています。有名な〈初等教育通信〉が十分立証しています。そして、教育雑誌が二十種類あるのも十分に意味があります。批判の記事は今でも書かれていますし、避けて通れません。最も簡潔な概念は、解説が大変困難です。アカデミー会員のバレスに私が立体の容積についての授業を一ヶ月後にやって貰うことにしても、彼は十分に解説出来ないでしょう。出来の悪い生徒が被る馬鹿帽子ものなのでしょうか。

いいえ、そうではありません。歴史には原因があります。終わりのない議論がその後に続きます。歴史は科学ですが、あらゆる偏見を生む貧しいレトリックでもあります。最良の歴史は決して一言で言えるものではありません。事実に基づいた観念の拘束を逃れて、全く反対のことを行います。選択し、一つに纏め、抱いている観念に従って事実が明らかになります。歴史は雄弁の言葉を支えているようです。しかし、歴史を支えているのは寧ろ雄弁の方です。ジャンヌ・ダルクは人々にそうであるように望まれているのです。

以上は歴史教育が見せかけであり、時々は嘘つきである理由です。詳細に記録を述べない時は入念に嘘が行われ、生徒たちは自ら考証することもありません。精神に毒を与えるためにそんなことを行うのが理性の働きでもあります。王たちがフランスという国の統一を作ったと言われています。決してそうではありません。フランス革命前までは民衆に権利が全然なかったと言われています。決してそうではありません。如何なる時代にも民衆は、現在を生活し、食べて、飲んで、愛し合うように、多分その時代も生活してきたのです。本当の情熱の奔流は何世紀にも亘って流れているのであり、忘却の深淵に落ちて消えています。歴史の真実は不可解です。歴史の授業は断片的な文書です。歴史家というものは〈うぬぼれ屋〉です。

歴史の真実は何処で読むことが出来るのでしょうか？　現在の生活に残されているものが全てを物語っています。歴史の真実は私たちの裡とその回りにあるのです。もっと正確に言うなら、それは未来を描いています。未来とは、過去が理性正しく表現されることです。死者たちの影が、私たちを冥界のステュクスの川を流れる水を超えて、光の方へ導いてくれるのです。ニュートンやアルキメデスやソクラテスに続きます。そして、聖ルイ勲章が楢の木の下に用意されているのです。

（一九〇八年七月七日）

八十七　（歴史教育）

カトリックの司教と学校の教科書著作者たちは、時間潰しの下らない議論ばかりやっています。疑問となっているのは何時も歴史教育です。そして、私は態度をどちらにも決めかねています。フランク王国メロビング朝の歴代のクロビス国王の時代には〈教会〉は大切な役割を果たしていたのでしょうが、私は何も知りませんし、全然興味もありません。ルイ十四世は馬鹿者だとか、ナントの勅令廃止は政治的に大きな間違いだったとか、そんなことに興味があるのは数人の剽窃者たちだけです。そんな判断は全く滑稽なことであり、同じ位に簡単なことだと言えます。多分、そのことを書く人はセンスがあるのでしょうが、何故根拠もなくその様な意見を学校の子供たちに言い聞かせるのでしょうか。彼らは世界を正しく見ていないのです。

以下に、歴史教育を私は如何に理解しているのかを述べてみます。科学や人間の産業として歴史を語って下さい。知識と行為が平行して進歩していく大きな時期を注目することです。火事、小麦、色々な数学、測量術、武器、一輪手押し車、天文学、船舶、バロメータ、気象報告書、化学、肥料、貨幣と契約、違法行為と罰則、神と信仰、これらの全てを注目して下さい。人間の生活だけが時代を生んでいます。そして、このことに関して気付いて欲しいことは、歴史の最も重要な部分は想像されなければならないことです。火を発明した人が誰か知りませんし、車輪を発明した人も知りません。しかし、彼らの精神は、この地球上で多くの人々の中で大変生き生きと引き継がれていますので、より明晰な人々なら記憶や試論や大変論理的な推測によって誰か他の人に教えることが出来ますし、これらの発明は如何なる〈神〉の助けもなく生まれたのです。道に道しるべがあるように、何か有名な名前を付けて下さい。ルイ十四世よりもアルキメデスが良いと思います。何故なら思考しなかった者の名前はすっかり消えてなくなり塵となるのが常ですが、思考した者のことは今でも皆が思考しています。よろしければ生きている歴史をどうぞ。

しかし、現代の歴史家たちは葬儀屋と同じです。最早この世にないことしか関心がありません。彼らの歴史は間違っており、真実ではありません。奴隷状態のようであり、力がありません。鎖を付けて移動する奴隷そのものです。そうでなければ如何なるものなのでしょうか。現代の歴史家たちは図書館の鼠です。蒸気機関車がどのように作られるのか知りませんし、発電機の線がどのように巻かれているのかも知りません。彼らは、今はもう存在しないものしか知りません。本当に私は、司祭と共にそんなものは背を向けて送り返してやります。彼らは喜びというものを非難するでしょうし、現代の平和のことなどお構いなしです。現代は学ぶべきことが沢山あります。

勿論、生きている歴史までも排斥したくありません。私が市民であることは確かです。しかし、そのことは歴史の中で言われていることであり、多くの人々がそれを主張して立ち上がります。多くのアルキメデスの子供たちも同じです。しかし、ルイ十四世が愚か者であったことを、現代の主任司祭に尋ねようとするでしょうか。私は何も分かりません。巧みで熟練した主任司祭は、そんなことは長い説教にとって何ものでもないことをよく知っています。盲目のような主任司祭は、私を地下室へ連れて行ってくれますが、それは少なくとも何もないことを分からせてくれるためです。

（一九〇九年十一月二三日）

八十八　七面鳥学校 (DINDON-COLLGE)

最近、私が〈ユートピア〉を旅したもののなかに、〈七面鳥学校〉を訪ねたことがあります。あなたは良くご存知のことと思いますが、その校名は人を面白可笑しくさせるために付けられた俗称で、正式には〈高等政治家学校〉と命名されています。そこの校長が私に言いました。「多くの人々は、本質的には物事の表面に現れるものが好きであり、他人の意見によって自分を大きく見せるように出来ているのをあなたはきっとお気付きです。彼らは平凡な生活に沢山の場所を占めており、何も良いものはありません。彼らがまだ若くて、民衆を統治するという自分の本当の職業に就くために勉強している時から、私たちは彼らのことを知っています。つまり国家というものは、無益な争いに力を尽くすべきではないからです。各人は自分の場所に。これが私たちのモットーです。そして、私たちは科学的知識によって彼らを蛙のお腹が膨らむように大きくしていきますが、そのことは彼らを苦労させないことに成るでしょう」。

話したことは以上です。校長は金色の槍になっている鉄格子から、生徒たちが威厳に満ちた歩き方を学ぶ記念階段まで私を案内してくれました。途上の栄光ある中庭では、〈栄光ある中庭は皆様を迎える〉と記されたブロンズ像の一群が眼に入りました。それよりもっと遠くにあるホールでは大理石像の一群が眼に入り、少なからず感動を覚えました。「このホールはこの手によって皆様をご案内します」と記されています。長い階段は、古い色調の壁の装飾であるフリーズを私に見せてくれました。校長は私に言いました。「此処にいるのは政府高官や高級官僚で、政府の直轄下に置かれています。此処にはマルス軍とミネルヴ大学があり、登記所や抵当権保存所や税務署とは違うことがお分かりになるでしょう」。

私たちはやがて寓意的な絵画に飾られた階段教室に這入っていました。一方に見えるのは〈不屈の精神〉を頭に載せた〈労働〉の像であり、他方に見えるのは〈労働〉を頭に載せた〈不屈の精神〉の像でした。中央には、〈方法〉が〈学問〉を訓示していました。一人の男の人が教壇で話をしていましたが、彼は手書きの原稿から目を離しませんでした。彼は言いました。「一般的な状況としては、何処にいようと人は知れば知る程〈ヨーロッパの均衡〉という正常な状態としての心配以外の心配を認めるのは自然とは思いません。そして、その〈均衡〉は次第に自然と合致してくるように定められている方向へこの国を導く、高貴な責務を引き受ける人々に一つの義務を生み出しています」。「講義は三十時間以上も続きます。ですから殆ど全ての生徒は眠ります。最後に眠った生徒が賞を取るでしょう」と校長は私に言いました。

私たちは、自習室でものを書いている生徒たちを眼にしました。彼らは、自分が書いたものを良く消していることに私は気付きました。校長は言いました。「生徒たちは書いたものを削除しますが、そうやって文章を書くセンスを身に付けることが出来るのだと思います。此処にいる彼らは若いです。沢山のものを削除します。しかし、私たちの学校には大変有能な者がいます。さあ、開戦論というテーマについて見てみましょう。優秀な生徒は、公開調査が何の妨害もなく行われ、とるべき責任は峻厳に行われるべきことを述べるために十二頁書きました。しかし、一番優秀な生徒は、戦いで家を焼かれたのですからその救済を要求しに来た市民に対して応えるべきである、と書きます。（これは本人が申し出たテーマでした。）彼は、質問することが学習することになっていくことを言うために二十頁書きました。この若者は立派に成長するでしょう」。

（一九〇八年十月六日）

八十九　特別数学クラスの生徒（LE TAUPIN）

リセ（高等中学校）の特別数学クラスの生徒というものを存知ですか。高等数学の授業ばかり受ける若者です。

特別数学クラスの生徒は、雀が歌う前に起床します。全員が水を撒いて、日々の思想的な楽しみを手に入れます。

先ず、九〇頁の機械論の本を読みますが、それは厳格で味気ない機械論です。蒸気機関車の疑問に答えるものでなく、自動車やタービンやその他の如何なる機械にも答えるものではありません。その本に書かれていることは、機械のない機械論で、代数の記号としての線と同じです。楽譜を読む時に聾唖者のようになるのと同じで、音楽のことを考えたりしませんし、特別数学クラスの生徒の喜びとなる観念は脆いものです。

こうした訳で自分と同類の不幸せな五〇人の生徒と共に、家具のない殺風景な部屋にいて、一人の人間の口述で一時間半書くことが十五歳の成果であり、両者の間には三頁分の文字が書かれることになります。文字表記の教授たちは忍耐強さを考えさせてくれますし、一スー貨幣一枚分の紙でも偉大な文章を生んでくれます。

それから床張りの教室では一時間に九〇カ所も落とし穴がある書き取りをします。最初の躓きに感謝されているのでしょうか、次のように言いたいように見えます、「あなたが特別な人間になるには、そんなにも頭が良くありません」。

次に特別数学クラスの生徒は別の部屋へ行き、物理をやって数学で疲れた頭を休めます。素直なのでしょうか、あなたは自問します、「そこにいるのは息をして、観察して、装置を使い、〈自然〉の真理に近づくまでになる子供なのだ」。素直な人間であるあなたは自分に背きます。もう少し早く書くようにして、自分では決して体験しなかったことや、これから体験することもないのにそのことを述べたり解釈したりします。その上、物理室のショーケースには装置が眠っています。生徒は眠そうで、羽箒できれいにしようと思いません。特別数学クラスの生徒はもう骨がなく、筆を取って勉強もしません。

目覚めることです。遊び時間が大切です。僅か五分間だけですが、思い切って叫んだり走ることが大切です。それというのも一般の若者たちが休息していても、特別数学クラスの生徒は試験の準備である〈口頭試問〉を受けており、何かに感動する心を結局は殺して仕舞っているからです。

勇気を持つことです。特別数学クラスの生徒も勇気を持つことです。そうすれば直ぐに苦しみはなくなります。あなたは技術者になるでしょう。そして、サインをして同意しさえすれば最早悩むことのない権利を持つでしょう。あなたは結局のところ休息を楽しむことになって、多くのものを手に入れることになるでしょう。

（一九〇六年五月二一日）

九十　理工科学校の学生たち (POLYTECHNICIENS)

理工科学校の学生は私の心を引き付け、そして退けます。私は黒い昆虫のような彼らの観察を止めることが出来ません。この昆虫のことを見抜いたと私は信じていますが、或る意味では見逃してもおります。一寸顔見知りになった彼らの思考は、何かに規制されたり調整されているのですが、激しいものがあるため、私は何時もびっくりしていました。それは盲目的な信仰と禁欲主義の混淆でした。両者はお互いに悪であると分かっていますが、それは禁欲主義の精神によるものです。多分、それらは余りに行き過ぎであり、極端すぎるからであると思います。人間の秩序や正義に沿った思想を、それらの主義から持ってこようとするなら、私は怒りを禁じ得ません。王のようなその権力は慎重で声も出さず、耳に聞こえないのも同然でしょう。多分、彼らピタゴラス派の悲しみを良く理解するには、熱心にデカルトを読まねばなりません。全ての基調をなしている革命的なるものは、彼らの思想においては絶対的で不屈であり、実際には保守的で、時としてカトリック的ですが、神学的という訳ではありません。「子供のときから教育させられた神の御心による宗教に従うこと」。それはデカルトが言う〈仮の〉規則のうちの一つです。それは大変に管理されています。彼らピタゴラス派の人々というのは、多分、服従はそんなにも辛いことではないのです。恐らく習慣的に彼らが遵守している規則を、心の底では軽蔑するようになっていたのですが、あらゆる規則に従うように固く命じられていました。現実をそんなにも軽蔑する必要はありません。軽蔑すると精神は現実的になります。それは結局のところ、正しい精神と正義の間に深い傷を負わせることになります。そのようにして人民の革命的精神が生まれます。人民は革命的精神にとって殆ど根源的なものですが、文無しの老いぼれのようになり、その次には納屋に置かれた儘になり、大地の香りを放っていますが、最早、発酵して成熟することもありません。

青春時代の判断は大変に早いもので、地獄の深淵に架橋します。壮年になるとそこに戻って来ます。彼にとって一番美しい仕事は、決して青春時代の精神を軽視するものではありません。純真な者は成熟しなければなりません。しかし、数学という学問は自分の最初の思考に際して、青春も壮年も関係ありませんから人を困惑させます。単純化すること、捨てること、対象を裸にすること、そして完璧な証拠を生み出すこと、それは世間をはねつけて拒絶することです。彼らの思考は高山の幽閉された修道院のようなもので、世俗に戻れば最早、慎重さと、時として礼儀正しさしかないのですが、それは世間を高く評価するからではなく、世間を軽蔑しているからです。パスカルが独りで微かな弱い徴の証拠を発展させたのを知って人々は驚きましたが、完璧な証拠は大きな愛によるものです。精神は最早、力を貸してくれません。社会的な力がそれを行います。要するに、方程式にならないものを二十歳のときに軽蔑することは決して良いことではなく、軽蔑が過ぎれば受け入れることです。肉体は余りに孤独であり、恐らく精神は情熱から大変遠くにあります。それは愚かさを十分に戒めています。「天使に成りたいと思う者は、馬鹿になる」。パスカルもそう理解していなかったと誰が知るでしょうか。それは軽蔑が軽蔑を生むようになるでしょう。しかし、心はどんなにか孤独であることでしょう！　理工科学校の学生だった現代の技術者たちは恐らく、パスカルが信じたように組織を管理しています。彼らは十万フランの大金を手にします。彼らはそれらを多分、自分の妻へ与えるのでしょう。そして多分、何の役にも立たない奇妙な確率のことを考えて物思いに耽りながら、月並みな思想を暗誦するのです。そして、彼らはそのことを意識して反省することさえありません。彼らは黒い昆虫なのです。

（一九一四年七月十二日）

（次章へ続く）

九十一　エヴァリスト・ガロワ (VARISTE GALOIS)

二ヶ月程前に、ブルク・ラ・レーヌにおいてエヴァリスト・ガロワ（１）を記念する大理石板の除幕式が行われました。二十歳で亡くなったこの人物は、純粋数学についてその後公表された論文があり、純粋観念を通して示されるものよりも、もっと難解な道を解明しました。私はこのことについて、それ以上のことは言えません。彼の伝記は、モラリストたちや教訓的お話が好きな人たちによって創られました。

ガロワは十五歳のとき、ル・ジェンドルの『幾何学』を耽読します。ガロワはうんざりしていた代数学の初等概論を否定し、ラグランジュの代数学を勉強します。十六歳のときには独自に考え始めます。科学アカデミーへ記憶についての論文を寄稿します。アカデミー会員たちは、その論文を少しも見ようとしません。ガロワは理工科学校を二度受験しますが、二度とも不合格でした。御用学者は馬鹿か怠け者であるという結論にガロワは達します。

しかしながらガロワは、高等師範学校へ入学します。一八三〇年のことでしたが、ガロワは七月革命の〈栄光の三日（２)〉を慎重な校長によって重要な役割を演じました。ガロワは〈共和制〉を熱心に愛しており、誠実な理想主義者でしたから、七月革命の事件を知ると激しい怒りを抱き、そして彼の栄光は奪われました。ガロワはこの件の話に触れたくないもののようで、詳しいことは分かりません。

只、もっとはっきりしている話は立派で信頼出来る王がそうであるように、ガロワも仲間と一緒に翌年は監獄にいたことです。彼は本当の真実について深く考えていましたが、他の人々は軽蔑されていると思い、口汚く酒を飲めと勧めました。伝え聞くところによると、彼は或る日いざこざを避けるために一リットルのブランデーを飲んだとのことです。酔払った王であるガロワのことを考えて見て下さい。シェークスピアもそこまではいかなかったことでしょう。

ガロワは監獄を出て恋に落ちます。恐らく、恋の雷は突然落ちたようなものだったのでしょう。何週間か後に彼は次のように書きました。（この引用は確かなものです。）「人間として最も美しい幸福の水源が一ヶ月で枯渇して仕舞い、幸福もなく、希望もなく、人生が乾いたままであるのは確かで、如何に自分を慰めたら良いのだろうか」　この恋愛によって彼は決闘をするはめになり、そして殺されました。彼は二十歳を過ぎたばかりでした。

ガロワは決闘の前に、方程式について自分のあらゆる記憶を検討しようと日夜没頭していました。そして、彼は殺し屋を相手にしたのだと思います。それ故に殺されたのでしょう。そのとき彼が考えていた思想の風景とは如何なるものだったのでしょうか。ペンで書くには間に合いませんでした。海の上に上がった一発の花火でしかありませんでした。けれどもその閃光は、小舟以上のものを見付けてくれます。難船以上のものを見せてくれます。それと言うのも、時折人間しか生まないということでは本当らしくないからです。私はむしろ人間は全てその人が考えて望んだことを一度に考え、望むのであると思っています。ところが彼らには、ペンを取る時間がないだけなのです。監獄、酒、女たち、そのことが人格破綻になるのでは決してありません。監獄は時として落ち着いた場所となり、良い考えや習慣を生みます。アルコールから醒めること、阿諛、婚約期間、成功、給料、勲章、おしゃべりを生みます。不正と世評が重い意味をもってきます。二十歳で死んでしまいそうなことは沢山あります。人生の控えの間には、何と沢山の影があるのでしょう。海の上に打ち上げる花火は、何と沢山あるのでしょう。

（一九〇九年八月十日）

（１）一八一一年にプール・ラ・レーネに生まれ、一八三二年にパリで死んだフランスの数学者。

（２）一八三〇年七月二七日から二九日にかけての三日間。言語統制から始まったパリ市民の民衆運動により、パリは市民の手に帰しました。その後、大銀行家や自由主義政治家が共和主義者を押さえて、七月王政を成立させました。

九十二　歴史家の精神 (L'ESPRIT HISTORIEN)

精神には二種類のものがあります。本を読んで直ぐに歴史の中でその作品を思考する人々であり、この作品は他の作品の前にくるとか後にくると言っている人々です。例えばバルザックの小説は、彼らにとってはその時代の骨董品であり、整理ダンスとか洋服ダンスと一緒です。もう一つの別の種類の人々は、バルザックを心の糧として読みます。それは現代を考えるためであり、現代を生きるためです。私は、歴史の領域外で考えようと努めていると敢えて言います。例えば、もしも私が古本屋の店先でラランド（１）の『天文学』を見付けたならば、それを読んで幸福な気持ちになるでしょう。当時の天文学の状況をその本から見出そうと考えて読むのではなく、自分の勉強になると思って読みます。そして、それは正しいことです。何故なら、当時の学問はたいしたことがなく、何もかも分かっていた訳ではありませんでしたが、私は自分でやらねばならないこと、今日の書物ではめったにお目にかかれない解釈をそこに見出すからです。他の人なら歴史にして仕舞うでしょう。しかし、私は寧ろ今日でも生き続け、有用なものとして歴史を生き返らせようと努めます。そういうものでなければ私は全く興味がなく、その他のことは模索している作品であり不十分な作品でしかありません。私は時代ものの洋服ダンスを遺産として貰い受け、時代ものであることなど気にせず、下着類をその中に入れる主婦に似ています。もしも錠が駄目になっているのであれば、大変首尾良く錠を取り替えることでしょう。

歴史家の精神が過去に行ったように現代を扱うのは注目すべきことで、私も同じように私のやり方で行います。歴史家は雑誌、パンフレット、そしてつまらない本でも全て読みますが、彼にとっては全てが無駄なものではないのです。彼は言います、「何故なら確かに、学者として価値のある多くの考えをそこに見出すことはありませんが、私が求めているのはそういうものではなく、その時代を私は探求しているのです。私は時代をあるが儘に捉えます。時代は私の眼には、出来の良い小説も出来の悪い小説も同じで、多くのことが語られているように見えます。多分、駄作の方がより価値のある作品なのです。何故なら、平凡な作品は当時の多くの人々が考えているやり方を表しているからです。それに反して、偉大なる芸術家は多分、四十年も時代に遅れた孤独の人であるからです」　歴史家は本を読みます。読んでいますが、心の中では何もかも全て軽蔑しています。

私はと言えば、今の時代であっても過ぎた世紀であっても、違った風には考えずに同じように大切です。私は傑作であると推薦されているものしか読みません。過去に人々が示した好奇心が鎮まってから読みます。要するに私が試みていることは、人々が忘れて仕舞うものを見抜くことです。それは精神に余分な負担をかけないためなのです。諸学問についても同じです。多くの理論が忘れられて仕舞うだろうと思います。そして、現代の物理学者たちよりも少しばかり遅れていることを私は愛します。その点では私は恐らく、歴史家たちが思っている以上に歴史を理解しているのだと思います。何故なら、歴史とは廃墟を横切って生き生きとした活動によって前進するものであるからで、死者たちの遺骸によって前進するものではないからです。しかし、歴史家の彼は実際に行われた歴史によって、生み出された歴史を重ねます。あなたは老人として生まれたのですと私が言うと、あなたは子供の儘死ぬだろうと彼は答えました。

（一九一一年四月十二日）

（１）ジョセフ・ジェローム・ルフランソワ・ド・ラランド（一七三二年～一八〇七年）。天文学者で、『天文学』を書き、惑星運行表を作成しました。

九十三　（科学の勉強）

司法官教育は、或る者たちには黄色リボンの勲章を持っている人々が行い、又他の者たちには赤色リボンの勲章を持っている人々が今でも行っていますが、その勲章は文学と科学のものです。或る者たちは思考することが出来ますが話すことが出来ません。又他の者たちは話すことが出来ますが思考することが出来ません。それは中国人的なやり方です。私の場合は二つのことを別々に理解させようとは思いません。理解することと説明することは一つであり、同じ機能と見做します。それらが教育の中心で、赤と黄色のように区別して行われることを私は知らない訳ではありません。しかし、その上更に理解しなければならなことは、科学とその表現手段である修辞学（レトリック）です。

科学は公式の寄せ集めでしかありません。優れた生徒を黒板の所へ行かせなさい、そして物理の問題を出すようなものです。空気中を水滴は如何に落下するでしょうか。次から次へと通常の言葉を V、T、X に幾つも置き換えて言葉を定義します。そして、一通り終わると結果が与えられますが、それは自動販売機のようなものです。最早、実用的である必要はないと言えます。代数は、本質的には道具か機械ですが、お望みなら少なくとも思考する努力を小さくするものです。勿論、科学教育の目的はそれとは反対に思考することであり、判断力を養うものであることを皆が知っています。どんな風に知っているのでしょうか。あらゆる知識が混じり合っています。代数的方法の理論と呼ばれるものは、実は最も高いレベルで実行するように思います。これは如何に科学が一般的な言語からだんだんと遠ざかって無縁なものになっていくかが分かります。従ってコサインを話すか、何も言わないかでなければなりません。

何も言わないこととは、純文学に任せるということです。そして、貴重な宝のように、しっかりと人の心をむことです。始めは子供たちに自分の古い思い出を語るとか、嬉しかったり苦しかった時の気持ちを分析する訓練をします。本質的には彼は知っている言葉で小さなタペストリー（つづれ織物）を作ります。先生は如何に判断するのでしょうか。言葉がなければ、子供が言いたかったことを知りませんし、知ることも出来ません。それ故、言葉の約束事は最早真実ではありません。つまり事物に言葉が一致しているのですが、多くは言葉に言葉が一致しているのです。「そんなことは思っていません」「実際に平凡な表現だ」「悪趣味、大袈裟、月並みなのだ」。

要するに子供を非難するのは、先生のように書かないからです。ところが子供は大変に早く成長します。このようにして優雅とも言える或る種のスタイルを作っていき、何の説明もなく愚かだった者たちがきちんと身なりを整えます。

何をしなければいけないのでしょうか。描くためのものがあるということです。その時、もし子供が上手に描けば、言うことも可能になります。事物は話を修正してくれます。先ずは右か左かごっちゃにならないこと、兎に角事を始めることが大切なのです。そして、現在あるものの正確な描写しか見ない者が、まさしく本当の科学の第一歩を勉強することになるのです。上手に語ることが出来なかったなら、何を知っていることになるのでしょうか。つまり科学の勉強の第一歩は、あるが儘でなければならないと同時に、修辞学の勉強の第一歩でもあります。

（一九〇九年八月三日）

九十四　ギリシア語への愛（L'AMOUR DU GREC）

教授が昨日、空に両手を挙げて私に言いました。「何もかもが死んで仕舞います。私は最高選抜クラスの生徒たちにプラトンを読み始めました。彼らは文芸を勉強しなければなりません。私は何時も通り、ギリシア語を通してフランス語を説明したのです。何故ならギリシア語はフランス語よりも裸のようにむき出しで力強く素朴であるからですが、その時私はびっくりしたような顔をしていた何人かの生徒たちを見て、彼らの多くがギリシア語を学んでいなかったことに気付きました。ギリシア語は結局、外国語なのです」。

奇妙だな、と私は思いました。何故なら多少ごつごつしたプラトンの翻訳を鍛えて推敲を重ねることがなければ、それらの言葉は重要でなくなるからですが、プラトンは身振りや声の出し方で素直な新しい思想をその儘全て見せてくれます。そして、私としてはフランス語の文体をより明確にしてくれて、より自然に近いものにしてくれるプラトンに々感謝しました。その次に感謝するのは〈ドイツ語〉のゲーテ、カント、ヘーゲルでしょう。〈英語〉では歴史家トーマス・カルリール又は詩人エマソンでしょう。デカルト、ルヌヴィエ、クールノーは、もし良い趣味を持っていれば誰もが読むでしょう。結局のところ、授業科目は快い気分になれば良いのであり、不平不満が出れば悪いのだと思います。心の底ではプラトンのギリシア語が遠ざけられてきたことを私は残念に思います。何故でしょうか。それはキリスト教的思想が現代において余りに支配的であるからです。デカルトは半分が神学者です。残りの半分は現代人ですが、ルヌヴィエのように聖職者的精神に反対しようとしています。そのことは型が内容を表すようなもので、今でも古い痕跡を残している一つの方法であり、レリーフは立体感を出すために穴が空いているのですが、穴があるからレリーフの立体感が出るようなものです。それは人のことではありません。現代の俗世界は神学によって生まれ、あらゆる神学を支配することで終わるでしょう。しかし、結局のところ抽象的であればある程偽りとなって色々な夢の始まりとなるようなやり方で大きくなった思想を、古代人の中に私たち現代人は探しています。異教の神々が理性的でないのは明白でした。そして、プラトンのような人が、取るに足りない信仰に何ら尊敬の念を抱かない〈理性〉の力だけで、非の打ち所のない倫理の偉大さや弁証法の確立や偉大なる詩歌へ高めてくれることを、読書に親しんで知ることは良いことです。説教師の話を聞くばかりでなく、現代の私たちがやるように唯一証拠を明示しながら、ここで宗教はやすやすと神話の形態を取るようになりました。そこから教養ある精神で、取分けミサには熱心に出ていた人々が、それにもかかわらず話をしたり議論すると異教徒であったことに私は気付きました。しかし彼らは、プラトンやアリストテレスやマルク・オレールやセネカという聖職者でない人々の精神の力によっているのであり、一般的な腰掛に座っていて成長した人々でした。しっかりした教養によるデカダンスによって多分私たちがこれから理解したり、既に理解していることは、無神論者が神学者として考えているのです。何故なら愛や憎しみや恐れで一杯になった重々しい理性を鍛えることしか出来ないからです。信頼は多くが道具に支えられており、それは構わずに冗談を言って現代精神に気付く時です。しかし、自立した理性の恵みは、ギリシア・ローマの古代人の裡だけにあり、それを心の糧にしている人は少ないのです。私はプラトンの微笑を愛しています。

（一九一二年十月二三日）

九十五　文化（LA CULTURE）

「文化の意味を明らかにしなければなりません。文化を助けなければなりません」としか理解されていません。しかし、文化的精神とは何でしょうか。教養、味覚、礼儀、倫理の全てをそこに入れることが出来ます。しかし、言葉で言うと余りに現実的なものです。私が大好きな先生は進んでその定義を私たちに引き合いに出して次のように言っていました。「航海術は責任が重いが満足出来る科学である」。しかし正確に言えば、航海術は科学とは別ものであり、漠然としたものです。文化も同じで、良いものがあるということが全てです。でも如何なる思想によってそうなるのでしょうか。私がそのことを大変によく感じるのは習慣からですが、偏見でもあり、疑問の核心となることさえあります。偏見は文化の主要部分になることもあります。「偏見のない大作家というものは決してない」とバルザックが書いたことは、明白な何かを意味しています。その思想には君主制擁護者やカトリック信徒のものが残されていて、全てが単独のものから成っていく訳ではありませんでした。そこに文化の特徴があります。単独のもので成るのは文化ではありません。

天文学を知ろうとするなら、単独でやることになります。加法、減法、乗法、除法の四則やユークリッド幾何学に基づく概念に従うしかありません。それらの概念は道具です。天文学そのものをもっと良く浮かび上がらせる工作機械であり、ケプラーの法則、ニュートンの引力、ＸやＹの〈言語〉、大仮説、要するに理工科学校の学生の精神という本の頁に書かれているもの全てと一緒です。それは全く単独の精神であり、文化とは無縁です。教養ある人間は、自分のものではないこの目録一覧のような意識を決して愛しません。貪るように読んだとしても、それを撥ね付けます。教養ある人間の力の一つは読んだものを完全に忘れることです。きれいにすること、入浴すること、泥を落とすことです。教養ある人間というものにはシニスム（犬儒主義）があります。世間的常識への軽蔑と抵抗です。決して惜し気も無く思考したくないのです。彼は歩き、未だ葉が密生していない樹木の中を走っている月を見ます。そこにあるのは天文学の本です。そして、もしあなたが世間的な外見から解放されて、太陽を観察する場所を確保しなければならないことを言って天文学を始めたならば、人の話を聞くことさえないでしょう。そのペダンチックな人は、嘗てラテン語から離れたように、代数からも離れます。

もしも文化を定義したいのなら、ペダンチックの人を定義することです。モデルとなる人にはこと欠きません。各々の科学、各々のラテン語翻訳者、あらゆる芸術家や職人にペダンチックな人がおります。そして、それらを勉強して身に付けている人がペダンチックな人です。滑車やロープでの仕事を引き合いに出して、次のように私に言います。「機械に何を求めますか。観念は今、不純物が除かれてきれいになり、曖昧さは少しもありません。子供っぽく振る舞うのではなく、勉強することです」。しかし、私は滑車を元に戻します。私が望むのは、観念の中で滑車が軋む音を出してくれることです。要するにペダンチックな人の中には二人の人間がおります。一人は間違えることなく話を進めていく人間ですが情熱がなく、そして次にロープを引っ張って野蛮人に化ける人間です。

この道を通って私が辿り着いたのは、そこで書くという技術であり、同じことを続けていくことです。何故なら、分かり切ったことを上手に書いた文章はつまらないものです。上手に書かれた沢山の小説がありますが、退屈します。言葉を掘り下げて欲しいと思います。そこに発見するのは、全てが古典の素晴らしさです。古代ローマの歴史家タキトゥスは私の兄弟です。モンテーニュも同じです。彼らの思考は情熱に溢れていて、地に足が着いています。彼らの本を読むと、私は犂の後を追う雌鳥のように夢中です。『ラ・アンリアード』とか『ザイール』においてヴォルテールは熊手で掻き鳴らす程度ですが、『カンディード』においては本格的に耕しています。喜びや苦しみや情熱や行動を生む思想、それが文化です。それを短縮

した人、それがペダンチックな人です。生き生きした思想は遠くへ行きませんし、早く生まれもしませんが、あらゆる人間が持っているものです。

（一九一二年四月八日）

九十六　内部統治 (LE GOUVERNEMENT INTRIEUR)

プラトンは自己抑制について驚くべきことを言いました。この内部統治は貴族的なるものに違いなく、つまり最良のものが最悪のものの上で統治するということを示しました。プラトンによると、最良のものとは私たち各々の裡にあるもので、理解するということです。私たち自身の中における国民とは怒り、欲望そして窮乏の人々です。プラトンの『国家』を読んで下さい。それもこの本について語るためではありません。つまり一般に言われていることを再発見するためであり、自分自身を統治するための方法を学ぶためであり、自己の内部に正義を確立するためです。

プラトンの主要な思想とは、人間が自分自身を上手に統治するなら善を見出し、単にそう考えようとしなくても、その他の人々が有益になるものを手に入れるというものです。それは道徳全体の思想というもので、そうでない部分はバルバロイ（未開人）の治安でしかありません。人々が平和を望み、単に恐怖からお互いに親切になったとき、あなたは国家における或る種の秩序をうまく築いているのは本当です。しかし、彼らの一人ひとりはアナーキーでしかなく、別の場所で暴君となって身を落ち着かせているのです。監獄の中では恐怖が渇望状態にしております。その中ではあらゆる悪が発酵します。外部秩序は不安定です。暴動や戦争が起こり、あるいは地震があり、そのとき監獄が受刑者を吐き出すのと同様に、私たち一人ひとりの裡には監獄のドアが開かれており、醜悪な欲望がその牙城を占領しています。

これ以上は言いませんが、それ故に計算と慎重の上に基礎を置いた道徳に関する教訓というものは、私はつまらないと判断します。もしもあなたが愛されたいと望むなら、寛大になりなさい。あなたの仲間を愛しなさい。彼らはあなたにお返しをします。もしもあなたが自分の子供たちから尊敬されたいのなら、あなたの両親を尊敬しなさい。これが町の通りに秩序を保持する治安に他なりません。一人ひとりは一般的に好機を何時も期待します。不正を働いても罰せられずに済むという好機です。

若きライオンの子たちが道徳手引き、カトリック公教要理、習慣と社会の枠に沿って爪を研ぎ始めるや否や、私は今までとは全く別なことを話すことになるでしょう。私はライオンの子らに次のように言います。何も恐れることはありません。やりたいことをやりなさい。如何なる奴隷制度も受け入れてはなりません。金色の鎖でも駄目です。花で飾られた鎖も駄目です。我が友よ、あなた自身の王になりなさい。その地位を譲ってはなりません。恐怖を支配する主人になるのと全く同じように、欲望や怒りを支配する主人になりなさい。もしも恐怖を感じたならば、あなたを怖がらせるものに向かって静かに歩きなさい。怠け者であるなら、自分にやるべき仕事を与えなさい。もしも短気で辛抱出来ないなら、絡まった糸を根気よく解きほぐすための毛糸玉を自分に与えなさい。もしもシチューが出来上がったのなら、旺盛な食欲で食べる王のようにして食べなさい。もしも悲しみが訪れたら、あなた自身の裡に喜びを見出しなさい。もしも不眠症の寝返りが、草の上の鯉がひっくり返るようにベッドの上のあなたを襲ったならば、動かないように努め、眠るように命じなさい。その次に、我が友よ、あなたは自分の裡で王となって立派に行動し、良いと思うことを実行するのです。

（一九一〇年四月四日）

九十七　（本当の勇者）

立派な徳のある者は皆勇気を持っています。何故なら〈臆病〉と言われることは、最も酷い侮辱になるからです。徳というものは自分自身を支配することにあります。その他のものを導くのは頭脳に違いないと私は理解しています。そして、何時も苦しみがない訳ではありません。何故なら私たちは袋の中に閉じ込められたように反逆する多くの動物たちを支配しているからで、それらの動物たちはなかなか前進しない馬のように、ある時は此方、又ある時は彼方と々自分の望みとは反対の方へ引っ張って行きます。人間というものは自分が行きたいと望んだ場所を正確に一連の筋肉を正しく動かして導いて行くものです。

目覚めていて、そして思考するソクラテスのように体を動かさない時、美徳とは賢明なことです。自分の筋肉を服従させて、他者への善意を考えながら野心的な心を同じ様に制止する時、美徳とは正義のことです。喜びに逆らう時、腹や胃や喉に文句を言う時、つまり十分に味わい飲んで食べた時、美徳とは体温が正常なことです。そして、何時も勇気があることです。しかし、苦痛の時、群衆に鞭打つのが〈君主〉です。そして、それでも群衆が秩序を維持している時こそ、取分け美徳に勇気がある時なのです。

知性はそれに有効な一条の光です。動物や事物に決して力を広げることがないと私は信じます。動物に欠けているのは勇気です。怒りではありません。怒りに襲われて苦痛を感じるや否や、どんな動物も必ず怒ります。勿論、何時も怒りです。動物がやることは何時も敗走です。前もって逃げ出すのですが、何時も敗走です。人間は勇気を持っています。ライオンの激昂も持っています。もっと遠い未来を予測しますので、より良く勇気を利用します。憎しみや怒りを育てていく技術があり、ばらばらの人間を一つの集団に訓練する技術があります。その意味で狂人は勇敢です。熱狂やその様な勇気の感染に何時も私が雷同せず、少しばかり抵抗を示す理由もそこにあります。〈英知〉のある人はそっぽを向いて、勇気という冠を被ります。しかしながら戦闘の最中に、外科医がメスを使うように、もしも誰かが震えることなく憎しみの気持ちもなく命令し、監視し、攻撃するとなると、彼こそが勇者です。私は十分彼に敬意を表したいのです。何故戦争に敬意を表わさなければならないのか。戦争は全てが決して美しくありません。

しかし、ここには別の勇者たちがおります。決して憎しみがなく、怒りもありません。彼らに反対すること、何かに反対することがあるのでしょうか。彼らの敵は砲火です。盲目的に撃つことは決してありません。お互いが模倣されることもありません。彼らの一人ひとりが技術者であり、射撃の名手であり、慎重な人間です。工場で行うように彼らの行動を事物にぴたっと合わせます。苦痛が彼らを襲い、死ぬこともあります。他でもなく彼らが危険なのは眼に見えています。けれども彼らはやるべきことに視線を定めます。そして、連隊のパレードのように彼らの肉体は意志を生んでいきます。本当の勇者がそこにおります。この世の本当の王がそこにおります。あなたは王の葬儀を執り行ったのです。それらの献金は私の処に持って来なさい。それは定義集という王冠になります。勇者の墓の上に誰もが庭の花々を持って行くのは当然です。

（一九〇九年五月二七日）

九十八　社会道徳（MORALE SOCIALE）

「社会道徳とは、社会に向かって行う義務という道徳の一部だ。この部分はだんだんと重要になっていくが、当然なことだ。確かに他人にやらねばならないことを知らせることは大変に簡単で、法律は私たちの良心をより一層明らかにしてくれるのに役立っている。連帯とは……」。このように哲学らしいことを言う若い商人が早口に長饒舌を奮っていました。

ところが賢明な老人が遮って言います。「あなたは逆説を言っているのですか。あなたが言っていることは、何もかもが混乱して仕舞うではありませんか。私が何時も考えていたのは個人的道徳が全てである他人に対する義務であり、社会的道徳ではありません」。

「言葉の問題です」と或る人が言いました。

「いいえ、決して言葉の問題ではありません」と賢明な老人は言い、次のように続けました。「実際の問題はその反対です。他人の人生に敬意を払うことは社会的義務ではなく、取るに足りない社会という存在とか本質と無関係でいたいという期待であると私は言っているのです。人間が不意をくらって驚いても、あなたは彼を拷問にかける権利はありませんし、殺す権利もありません。盗みに対しても同じです。私は誰からも盗むことを自分に禁じます。努めて正しくありたいと思う意志を強く持っており、私に似ている者には寛大であり、単に同郷であるばかりではありません。そして、中国人や黒人がやっているように支払伝票の不正が多くなれば、私は恥じることになるでしょう。ここでは社会と何の関係もありません。社会のことを考えることはありません。

あるいはその時、もしも私が社会のことを考えるのならば、連帯の名において私に要求するのは何でしょうか。事情が事情なら盗み、不正、嘘、暴力、復讐に同意し、懲罰と戦争という二つの言葉に同意することを連帯は要求してきます。そうです、社会とはそのように悪い行為しか私に求めません。社会が私に求めるのは正義と慈悲の気持ちを持つべき時を忘れさせることであり、国家の安全という名においてそのことを求めるだけですが、よく考えてみる必要があります。ですから社会道徳について言うのは、次のようにその目的が明確にされた状態であって欲しいのです。つまり〈国家の安全〉とか〈国家理由〉は、私たちにその遂行を命じることがあり得ますし、不愉快な行為をよく考える練習になります」。

そのように言って賢明な老人は注意力を目覚めさせるために、習慣的な型に嵌まった表現を振り落とすことを楽しんでいました。この間、哲学らしいことを言う若い商人はぽかんとした顔をしていて、まるで聖務日課書の一頁が破られているのに気付いた主任司祭のようでした。

（一九〇六年十一月十一日）

九十九　互いに愛し合いなさい (AIMEZ-VOUS LES UNE LES AUTRES)

モラリストは言いました。「互いに愛し合いなさい（１）」とは、そこに重大な秘密を発見した訳ではありませんでした。愛は生命に不可欠な真の豊かさである、と私も本当に認めます。それは自分の限界を超えて行為の中に身を投げ、そして力を尽くすためには一番良い動きであり、我が身をすり減らし、少しの打算もありません。非常に疲れ切ったり歳をとったりすると愛が無くなることも私は知っていますが、そういう彼らは非常に身勝手な吝嗇でしかなく、最早善徳を期待することは何もなくなります。悪徳でさえ同じです。完璧に用心深くなると私たちは死に接近しますし、殆ど長くもたなくなります。人生の習性にはめちゃくちゃに激しい愛があるのです。何でもそうです。動物にもあります。それというのも、馬はギャロップ（駆け足）で走るという目的があるからギャロップで走るのです。そのときは間もなく力一杯出発する時であり、自分自身にやる気を感じる美しい時でもあり、それが愛であり全てを創るものです。もしも、もうギャロップで走りたくないと思ったならば、最早、草原を見ることもなくなるでしょう。そのことは人間にとっても、さらに一層真実です。何故なら私たちが知る限りにおいて、人間は動物よりも多くのものを感じ取り、より良く理解するからです。愛は詩です。

それ故に私が望むことは、正義の掟というものは愛がなければ無意味であるということです。死んだ馬に手綱をつける理由があるでしょうか。そうであるなら、掟がなくても愛することで十分なのでしょうか。最も生き生きとしている人がこの考えに一番正しく正義があることになります。ところが、この考えは真実ではありません。吝嗇家は、憎しみを折りたたんで仕舞い込んだような人間ですから、戦いや拷問を理解出来ませんし、アレキサンダー大王の征服もジャンヌ・ダルクの火炙りの刑も理解しません。歴史の中には草原を走る馬のように、愛がギャロップで走っています。愛はからみつきます。愛は人を苦しめることも良くありますが、全てが同じ活動です。愛は平和です。愛は戦争です。その底にある狂信的行為も、人が感激するのと全く同じ愛です。虐殺の中にも寛大のようなものがあり、能動的な残酷行為にも寛大があります。愛人たちが感じているのも同じものです。最も良く自分を犠牲にする英雄たちは、最も良く人を殺す者でもあります。

「隣人を自分のように愛しなさい（２）」。そこには一つの掟があります。最早、既に生の儘の裸になった愛ではありません。その掟は決して良いものではありません。人は掟そのものを愛することは決してありませんし、それは最早、愛ではありません。それは既に述べたように貧しさであり、冷たさであり、吝嗇です。征服者は、そんなにも自分自身を愛していません。そのことを立証しているのは、彼らが非常に良く殺されて仕舞うことです。宗教裁判所判事は決して自分を愛していません。そうでないと、彼は恐ろしい存在ではなくなるでしょう。けちんぼでさえも、自分自身を愛していません。彼は何も愛していません。そして、彼はゆっくりと死んでいるのです。何故なら、何も愛していないからです。

愛は決して区別しません。愛する人と、彼が愛している人は全て一つです。それが愛の特徴です。もしもそのことを忘れたならば、人間の生活というものを理解することは不可能です。熱愛されていた愛人を殺した恋する男は、同じ銃の一撃で自分を殺すことも良くあることです。彼は、隣人の愛人を自分自身のように愛します。他人に優しくて甘い人は、自分自身にも優しいのです。他人に意地悪な人は、同じ衝動によって自分自身にも意地悪です。良く言われているように、愛は盲目です。

それ故に、私たちはどちらかと言うとプラトンやマルクス・アウレリウス（３）から大きな影響を受けていますし、カントやその思想に何らかの掟を見出した者の影響を大きく受けており、愛と戦争に双子の神々のような何らかの掟を見出した者の影響を大きく受けているのです。

（一九一〇年七月四日）

（１）ヨハネによる福音書、十三章三四節。モラリストとはイエス・キリストのことと思われます。
（２）マタイによる福音書、十九章十九節。マルコによる福音書、十二章三一節、三三節。ルカによる福音書、十章二七節。
（３）古代ローマの皇帝（在位は一六一年～一八〇年)。『自省録』を著し、ストア哲学を修めました（一二一年～一八〇年)。五賢帝の最後の一人。

百　道徳・危険なもの　（MORALE:DANGEREUSE）

その企業家は私に言いました、「息子の道徳ノートを数頁読んだところだ。私の信仰といっても、もうキリスト教の入門書以上に知っている訳ではない。ドイツ語を翻訳したこの定義ノートは、〈三位一体〉の教理と同じことを書いてあるし、ドイツ語よりもフランス語の方が分かり易い訳ではない。あなたは自分で読むことだ。目的を達成する中で、あなたは市民であると同時に恰も立法者であるかの如く何時も行動してくれ。そこに何者にも妨げられない道徳があるのだ」。

私は彼に言いました。「ええ、土の中の砲弾のように、道徳には気を付けて下さい。砲弾の中を見ようとして開けてはいけません。あなたは〈理性〉に従って人間が個人として、手段ではなくて目的としているに違いないことを言っているのを聞いたことがありませんでしたか」。

「いや、私はそんな訳が分からない本を読んだのだ。一市民のパトー（１）の道徳が最も分かり易く、あなたもご存知のように、それは闘争的な人間のものである。実際に闘う時に道徳心を言うように、あなたが実行出来る時に私に言ってくれ。これは冗談を言っているんじゃない」。

私は彼に答えて言いました、「戦争は戦争を呼びます。機械による支配が到来して以来、木綿とか織機とか耕作作業の牛を購入するように新聞を購入するようになりました。もしも労働力が低賃金であったならば、使用者は上機嫌であり、労働者たちの衣食住や子供たちの教育や成長には低賃金のために無関心でいることでしょう。それが戦争であり、勝利のためには仕方がないことです。人間はその時、人間のための手段であり、道具になります。私は鶴嘴を持っています。もしも地面が固かったなら、鶴嘴を使ってさっさとならします。それが駄目になれば、別のものを購入するでしょう。この様にして少しの心配もなくあなたは鶴嘴のために給料を使います。何故なら、鶴嘴で子供たちが教育を受けることは決してありませんが、給料があれば教育が受けられるからです。

それでは一体何を望んでいるのですか。最早、それは道具でもなければ手段でもなく、目的なのです。公平な給料が決められなければなりません。市場に基づいた労働力の価値ではなく、必要性というものを加味し、人間になくてはならない余暇を加味した人間的生活の条件になるもので、病気の時の介護とか、疲れたり老いた時の休息です。使用者はそれらを与える資格が無く、労働者はそれらを受ける権利が無くても、給与があることを理解すべきです。そのことは思いがけない結果を導きます」。

彼は言いました、「まあ！　悪魔だ！　それじゃ労働総同盟の教義であり、息子は何を教わるのだ。私は神学の方がずっと好きだ」。

私は彼に言いました、「神学も信用してはいけません。そして、福音書を説く主任司祭は何も理解していないことを先ず確かめて下さい。観念というものは全てが危険であり、観念論者たち全員を絞首刑にすべきです」。

（一九〇八年九月十一日）

（１）電気産業労働組合の書記であるパトーは、八月六日の予想外のストライキで二時間パリから光を奪いました。

百一　（自由な判断力）

倫理の力が優位を占めていることを私は信じます。そこから私が理解するのは、誰でもこの世では何よりも公平さを愛していることであり、あるいはそうでない人ももう少しで愛するようになるということです。偉いと思われている人々の前でこの種のことを言うと、彼らは私を馬鹿にします。もしも私がそのことを強調したなら、彼らはこの世の権力が戦争や勝利にその源泉があることを示しながら、何かの月並みな思想を力の支配に求めます。最も悪賢い者たちは、何故正義という力の服を着てきたかを説明します。それというのも彼らが言うところによると、最も力がある者は、何時も武器の力に留まりたくなかったからです。彼は力を基礎にして確かな平和を築きたかったのです。ところで人間は々、間違った意見に導かれることに注意しながら、間違った意見をまき散らすことは大変容易であり、取分け、もしも子供たちや無学な者たちに訴えかけることから始めたならば、最も強い力で制定された法が正しい法であると、至る所で説教されることになります。その結果、心の中に生まれたのは単に恐怖ばかりでなく、尊敬や愛も生まれたに違いありません。この宣教は十分に成功しました。そこから齎される思想は、行為が他の何よりも正しいというものです。

以上の話はあなたをがっかりさせるものです。実際にどんなに困難な状況においても、自分を見失わないのを理解することです。一方では偏見や混乱した観念や司祭の横暴を恐れます。それらは古くからある尊敬すべきものを私たちに全て強く批判するに至ります。それ故に私たちは神と同時に、正義に鞭打つ勇敢な少人数の人間に何時も同意します。

しかし、他方では暴君とか死ぬこととか不死の神とかに対する、崇高な怒りが何故あるのでしょうか。あらゆる権威に反対して戦争を行うのは、喜びや豊かさや自分自身にとっての専制君主を愛するからなのでしょうか。そんなことは大変馬鹿げていると思います。私は毎日のように気付いているのですが、野心家たちは懶惰な権力を囓って仕舞うと、権力の小さな欠片が与えられるや否や、直ぐに大声を出すことさえ止めて仕舞います。ですから私のことを笑う偉そうにしている人に、私は次のように言いました、「何故あなたは権力者たちに対して大声を出すのですか。あなたは番犬なのです。金利が与えられているか、給料を貰っているか、勲章をも貰っているかです。如何なる口惜しさがあるのでしょうか。もしも公平でなかったならば、何故そのことを言いふらすのでしょうか。負けるしかないのです。

あるいはその時は、お金だとか喜びをもっと沢山手に入れる何かがあることを認めることです。それは何でしょうか。観念の中の秩序とか明晰さです。話をしている時の誠実さであり、判断する時の自由です。眼に見えない多くのものがあり、幸福は権力の外にあるのでしょうか。そうである、と私は理解しています。体制内の正義を崇めることよりも寧ろバリケードの上であなたは死にたいのでしょうか。判断力を抑圧したいと思うことは、ですから不当なことです。そして、もしも自分で闘いたいと思うものに対して不当なことがあったならば、自分の利益や人生まで危険を冒すのに代って、正義があるのです。善良なるソフィストであるあなた方が私は好きです。そして、あなた方は不当な目にあっている者を十分満足させているのです」。

（年月日なし）

百二　カリクレス (CALLICLS)

『ゴルギアス』（１）というプラトンの対話篇がありますが、誰でも読むことが出来ます。ニーチェの裡にあるものの本質と、良識という反論もそこに見出されることでしょう。もしもニーチェが凍結させたものを再び熱したかったならば、それは今から行うことが出来るものでもあるでしょう。ギリシャ時代のあの頃の人々は私たちのように考え、そして私たちより上手に語りました。

それ故、人はそこに裁きを嘲笑し無視する一人のカリクレスを知り、彼は力に対する或る賛歌を歌います。彼に言わせると、平和のために正義をでっち上げるのは臆病者たちであり、正義の仮面を被っている恐怖を崇めるのは愚か者たちです。実際には、如何なる裁きも私たちを強制するものは何もありません。私たちを強制させるのは臆病と弱さだけです。それ故に勇気と力を持つ者が、そのことだけによって権利をも持つのです。現代の多くのカリクレスたちも、私たちに同じ調子の歌を歌っています。――そして、労働者は力を失えば失うだけ、如何なる権利もなくなります。使用者とその同盟者たちが、異論の余地のない確実な力を持てば、あらゆる権利が手に入ります。このように社会そのものは別に良くも悪くもならず、何時も権力者たちに有利に働き、権力者たちはそのためにそれを正義と呼んでいます。そして、弱い者たちには何時も厳しく、弱い者たちはそのことのためにそれを不正義と呼んでいます。このようにカリクレスは話をしました。私は殆ど彼の言葉を変えていません。

この衝撃的な話を彼が終えた時、そのような話は一時の流行に過ぎなかったとしても、今のあなたがそうであるように、その場にいた全ての人が結論を考えました。つまり皆の眼がソクラテスに注がれました。何故なら、ソクラテスは正義について全く違う考えを持っていたと十分に想像されたからです。そして、それ故に恐らく彼が頭をひねって所々で「ノン」と否定したのを知っていたからです。ソクラテスは暫く黙っていて、そして次のように言う人でした。「ねえ、あなたは何かを忘れています。幾何学は、神々や人間たちの裡においても大きな力を持っています」。それを聞いて、私はチェスをして遊ぶときのように、「うまいぞ！　実にうまい手だ」と言うでしょう。

問題の全てがそこにあります。幾何学と同じ範疇のものによって、自分の〈理性〉に目覚めたとき、人はそれに目覚めなかったかの如く思考してみても、最早生活出来なくなります。人は自分の理性と一致させなければならず、すべては呑み込んで腹の中です。その腹が隣人のパンを要求して、食べて満足して眠るからと言っても、理性が満足することはありません。同様に、眼に付くことはその腹がものを食べても、〈理性〉はそのために決して眠らないことです。全く反対で、それは疲れた猟犬の群のように欲望がお互いの上に眠って働かない間でも、〈理性〉は眠らないとはっきりと言えることです。それは一人の人間と社会的人間とは何か、正しい交換か正しくない交換か、その他色々なことを理解するのに適用されます。理性そのものとともに、知恵や平和とは何かも同じです。そして行動の規範となっている理性によって、欲望を抑制するものと別問題であり得るかどうかを理解するために適用されます。その後、理性は相応しい交換と均整のとれた欲望をはっきりと思い描き、最後には観念的でなくなり、権利とか正義そのものになります。そこから金持ちの理性が、貧しい者の欲望と同じ方向に落ち着くようになるのは避けられません。多分、そこで最も偉大なことは人間になることです。

理性はその名残のように経験が齎すものであり、その名残として私欲を齎すと反論する者たちはどうかというと、彼らは腹が減るとものを食べるように理性が振る舞うと何時も思考が出来る訳ではありません。何故なら、眼も腕も大地の二人の息子ですが、それでも眼は腕ではないからです。

（一九〇九年十二月二九日）

（１）プラトン（ＢＣ四二七年～三四七年）が、ＢＣ三九〇年頃の三〇歳代に書いた初期対話編の一つ。ソクラテスの相手となるのはシシリイ島出身の弁論術の大家ゴルギアス、その若き弟子のポロスと現実的政治家カリクレスで、その大半はカリクレスとの間で行われます。主に弁論術と政治についての見解を明らかにし、後の『国家』へ繋がっていきます。

百三　権利と力（DROIT ET FORCE）

〈権利〉と〈力〉は、お互いに決して対立しません。それら二つの観念は明瞭です。年上で力が強い子供がもう一人の子供のビー玉を取り上げると、表面的には年下の子供の権利が無くなっているように見えますが、上辺だけでしかありません。力を行使しても権利を変えられるものは何もありません。幼い強盗はビー玉を自分のものにしていますが、所有権はありません。もしも長男がいれば、幼い泥棒を殴りつけて、弟のビー玉を取り戻し、事態は無事に収まり、秩序は回復します。しかし、秩序そのものとは何の関係もありませんでした。ビー玉が弱者のものであったのは、兎に角本当のことでした。

権利とは一つの意見であり、判断であり、思想です。権利のため及び権利に反対する闘争とは、イデオロギー闘争であり、議論闘争であり、決定を下す裁定者の前で行われるものです。その時、必要なのは理性であり、拳骨ではありません。々時効を挙げて反論するには、所有権という権利が与えられ、疑義を挟まれないで所有するまでには三十年間必要です。しかし、その占有の根拠になっているものは力でないことを十分に注意することです。あらゆる方法で維持されている占有は問題になりませんが、問題なのは疑義を挟まれない公共財産です。それは法律に基づいていて、抗議が出来ません。三十年間如何なる人間も判事の前で所有権に対抗する明確な証拠があるかどうか、その後の所有者であると言って来る者たちは、審査不可能な要求しか持って来ないのではないかと仮定します。それ故にその所有者に勝つのは、権利を作るからでなく、議論や理屈で攻撃されない所有者であるからです。

第一占有者の権利は、取得した事実や力の結果であるとも々言われています。しかし、その概念が曖昧になっても、明るい光が理解させてくれます。何故なら最初の占有者が他の一人とか十人よりもその権利が強いものではないからです。自然の成り行きから言えば反対で、占有したり耕作する者は脅威を与える者よりも弱く、産業に代わるには戦争しかありません。そして、次に重要なのが権利で、つまり世論や裁判です。そうでないと第一占有者の権利は、力によって維持されなくなればなる程、無くなってきます。そして、ジャン・ジャック・ルソーが言うように、権利は何も増やさないし、何の通知も出しません。占有権者は理性的に仲裁人の決定を推測します。占有は極めて現実のものであって、仕事量や柵によってはっきりしており、慣習や利用状況、つまり過去の長い経験によって固められて明確になっていきます。そして、これらの論拠から討論した後に決定され明確にされて一致し、その占有が認められて今後が保証されていきます。新規の所有者は、新規の論拠を齎すに違いないものをそこから聞き取ることです。その様にして法律の名において、私が要求出来ることとは、誠実な承認の履行であり、約束の実行です。そして、法律の反対側にあるものとは、裏表のある二枚舌であり、不誠実であり、虚偽です。仲裁人の前で異議を唱えて法律に挑みます。不誠実という否定的行為、の誓い、そして偽証によって法律に違反します。しかし、法律そのものの力は大きいか小さいか、抑え難いか、他のものに抑えられるか、押しつぶされるか、それだけです。可能な限り間違いはありません。回転して行く石は、決して間違いがありません。押しつぶすべきものは、必ず押しつぶします。

（一九一二年五月二六日）

百四　（正義と力）

法を守る者には二種類の人間がおります。法律を尊重する者と、ものとも思わない者です。人間社会が存在して以来、何時の時代にも合理的に存在する都市を統治する理想的な掟として法律を制定した賢者たちがおりました。そして、彼らは自分の周りの実際の都市を見ながら、欲望と憎悪が混ざり合った中で、法律の影のような影響を識別するのは大変に困難なことでした。それ故彼らは嘆きました。そして、そうでない人々も将来は嘆くことになります。

その間に、流血を好む野獣のような人間たちは、やむを得ず戦闘中に考えを整理することは少なく、同盟関係が長く続くようにしました。もっと強くなることを宣誓し、自らを祖国に捧げるのは隣国を征服するためでした。この様に美徳は、格言では殆ど予期できない処で生まれました。団結は力を作ります。誠実は団結を作ります。誠実は、自己を忘れた無私を前提とします。

奇妙なことですが、人間が不公平でなかったのは、公平であるという条件にあっては外国人に対してでした。古代ローマ人たちは共同作業に献身して、自分たちの法律を厳格に遵守したために征服する力しかなかったのです。それ故に彼らの暴力は、法律という馬の尻に乗ったものであり、槍の先には或る種の正義があると言えます。

従って動物的な肉体的力の競技によって、人間はより立派な徳を持ちました。戦争の技術を学ぶと同時に、平和の技術も学びました。それは何時の時代も同じでしたし、これからも同じでしょう。人民にとっての一番の公平さという正義は、平等の数であり、それが一番の力になります。人間は法律を犯すでしょうが、最初は遵守した状況があります。都市国家の人々は、肉体的な力のある〈賢者〉や戦争で武装した技術・職人の女神ミネルバを崇めます。そして、奇妙ですがこの必然的な現象を私は〈進歩〉と呼びます。以上は法律による統治が来るだろうと私が信じる理由です。正義と力がそこへ前進させてくれます。

（一九〇七年六月十二日）

百五　（事実の見方）

或る詭弁哲学者（ソフィスト）が私に言いました。「正義とは言葉でしかない。習慣でしかない。正義が習慣である限り、最も数が多い習慣によって決められているのだ。そのことをあなたは否定することは出来ない。事実はあなたにぴったりくっついている。あなたは両親を尊敬しているし、あなたと一緒にいる限り楽しい老後が保証されており、そのことは正しいと言える。未開人は父親を焼いて食べるが、それは父親よりも若い肉体に父親の魂を宿すためだ。それは正しいことであると未開人は言う。共和国が正しいとあなたが言うのも同じだ。他の人は君主制が正しいと言う。この私は、正しいものは一般的に正しいと認められているものである、と言う。全てが持続していく限り、社会と関係していることがそれ故に正しいのだ。それ故に私はあなたに忠告するが、アランよ、そんなにも原則ばかりを熱く振りかざさないことだ」。

父親を食べる未開人の話は何処にでも転がっているが、熱くならないでこの議論を検討してみましょう。本の中に身を隠していたこの未開人を事実として見てみましょう。そのことは何を証明するのでしょうか。正義や徳やこの種のあらゆる事柄を自分に課するという思想は、私たちが現在所有している思想とそんなにも異なっている訳ではありません。何故ならそのことを良く注意して見ることで、もしも自分の年老いた父親を食べたとしても（子供として何というやくざ者であるか）、自分の喜びのために食べたのではないでしょう。もしも食べたのが自分の喜びや必要性のためであったならば、最早良い行いとは言えません。自分の年老いた父親を食べるのは理性からのものであり、あなたが言うように自分自身の肉体の中に父親の魂のための隠れ家を与えるためであり、老いぼれた肉体には今でも悪が住んでいるためです。ところで私は人間の徳というものは、全てがそこに寄せ集められると言います。何故なら理性によって行動しようと努めるからで、情熱によって行動するものではないからです。そして、それが正義であり、称賛すべきことであるからです。私たちも現在同じことを言います。この未開人は理性的なことについて間違えていると単に私たちは考えますが、もし未開人が正しい規則を間違って適用しているだけであったならば、私たちはそれなりの市民になり得るものとして教育出来ることになります。思考に従って行動することであり、空腹に従うものではありません。

議論が駄目になった今となっては、父親を食べるこの未開人をもう一度考えてみましょう。この種の議論は滑稽でないと思いますか。この未開人は何処で捕らえられたのでしょうか。宣教師の話に合わせて私たちの習慣を規制するのでしょうか。それらは話のための話でしかありません。事実を良く見るためには、強い精神がなければなりません。他人の眼を通して見ることは、愚かな者がやることです。それ故に司祭を信用しないのも一つの方法です。あらゆることにおいて司祭という人間を疑ってみましょう。ですから私は司祭が語る出来事を否定します。

しかし、習慣を決して生まなかった国に、その習慣の行為に高める大変強い力となる出来事を、私が認めるのは何時でしょうか。私たちは太った子牛を散歩させます。外国人は、私たちが子牛を大切にして崇めると言って、習慣としてよい結論を下すでしょうか。私たちの国には売春宿があります。この奴隷のような女性は自然で当然のように見えるからといって、外国人はそれを習慣としてよい結論を下すでしょうか。私たちの国内には決闘があります。彼らは〈神〉の裁きにさえも闘っている、とあなたは結論を下すでしょうか。いいえ違います。私がこれらの未開人についての話を聞いたのは、全てが金持ちたちから金を支払われた歴史家たちからです。そして、もしこの金持ちたちが、阿片を吸うように歴史によって眠ることなく自分の足で静かに歩き回ることがなければ、私は彼らを気の毒に思います。価値のない贅沢なものに高い金を支払っているのですから。

（一九一〇年）

百六　理性的道徳　（MORALE RATIONNELLE）

その詭弁哲学者は、再び攻撃して来ました。彼は私に言いました、「存在するものは存在し、存在しないものは存在しない。私は存在するものに合わせて自分の行動を決めたいと思うし、人間というものが少なくとも愚かでなければ、多くがその様に行うに違いない。車大工が馬車を造る時、所有している木材と鉄で造る。口で言う代わりに全てを決めるのは行為であり、道徳も推して知るべしだ。そのことを知らなくても、もしもあなたが神学という毒を飲まされていなかったならば、はっきりとしていることである。何故ならあなたの理想とする正義は、仮面を被っている〈神〉とは別ものでしかないからだ。それ故に私は、共和制の正義があるように、君主制にも正義があると言う。そして、一番良いのは現に存在するものであり、継続しているものである」。

私は次のように彼に言いました。「そう言うのでしたらあなたはローマ教皇である限り、どんなローマ教皇でも正当化し、火刑である限りどんな火刑でも正当化するのでしょう。何故なら、最早〈正義〉を信じなくなった時は、その残った部分を信じるのでしょうが、それは注目に値するからです。〈教会〉は無神論者のたまり場です。あなたは頭を振って疑ってはなりません。私はあなたを理性的でないと侮辱することはありません。あなたが言う例をもう一度私も考えます。車大工が車輪を造る時、出来る限り丸く造ります。私が丸いかどうか彼に尋ねれば、車輪の中心からの長さは全ての処が等しいから丸い、と彼は答えるでしょう。そして、車輪を造りながら彼が考えることは。出来る限り最良の円、つまり車輪の中心からの長さが等しくなるような最良の円に近付くことです。そして、完璧な円に近づければ近づける程、車輪は最良のものになります」。

詭弁哲学者は言いました。「しかし、一番丸い車輪が一番良く回転するものでもあり、馬車の揺れも一番少なく、一番重い荷物にも耐え、抵抗も一番少なくなります。これは経験から学んだことです」。

私は彼に言いました。「そのことを誰が疑っているのですか。完全な円は観念でしかありませんし、それは大変良く分かっていることです。従って、車輪を造る間はお手本を見るようにして眼を向けるのはその完全な円です。私が言いたいのはそこです。この完全な円は存在していませんし、これからも決して存在しないでしょう。それは〈観念〉と呼ばれているものです。人間たちには観念があります。それが人間です。あるが儘にそれを認識しなければなりません。猟犬の耳は長く垂れています。牛の蹄は二つに割れています。馬は割れていないで一つだけです。人間にも〈観念〉があります。正に〈観念〉が持てる唯一の動物です。〈科学〉の歴史は、その様にして苦労して作られた〈観念〉の歴史でしかなく、そこから人間がこの地球上を支配することになるあらゆる発明が生まれました」。

私はこの話を終わらせるために詭弁哲学者に言いました。「住みやすい都市を造る時に、この最良の道具である〈観念〉を正に捨てるようなことを、もしもあなたが望むのであるなら、あなたは間違えることになります。多少なりとも完全でない粗雑な車輪は揺れてばかりいて軋むのと同時に、その粗雑さが丁度良い時もあって、或る時はぴったりしますが、別の時は揺れるものでした。そこから賢明な人々は如何なる種類の平等がより正しくなり得るのか、そして本当に正しいのかを探求しました。例えば或る契約が無知のために不公平であったり、契約当事者のうちの一人の立場が弱くなったりすることがあると、より正しい契約の観念が生まれ、平等の精神によって知識と力が明確になりました。そして次に完全な形の契約に注意を払いましたが、それは存在しないものでした。これからも決して存在しません。それはお手本と見做されて、大胆にも彼らは次のように言っています。奴隷制は不当であり、奴隷の身分も不当であり、他にも不当な者がおります。友よ、あなたは書くことが大好きですが、人間の獣性を書く時は、この〈観念〉を忘れないで下さい。そこには人間の武器となる爪があり、吼える声があります」。

（一九一〇年六月十五日）

百七　治安と公平 (POLICE ET JUSTICE)

〈公平〉の概念には、何とも驚くべき曖昧さがあります。恐らく、その原因は絶対的な〈配分的公平〉と〈相対的公平〉を表すのに、基本的には同じ〈公平〉という言葉を使っているからです。ところで、この二つの機能はお互いに少しも似ていません。前者には各々が不平等であることが内包されており、後者には平等であることが内包されています。

取引をするとき、私は話をつける前に不平等が絶対にないかどうか、熱心に話し合ってから契約を結ぶようにします。例えば、もしも一頭の馬を売る話があるとすれば、相手は私が知っていることに無知ですから、相手が態度を決める前に教えなければなりません。平等であることとは、つまりお互いが平等と感じる相対的公平のことです。

私は馬を審査する立場にあります。この馬を飼育してどんな価値があり報酬があるか言わねばなりません。私は相手にその価値を教えるのです。配分的公平です。

私は数学を教えます。目の前にいる子供たちは、皆同じように平等に教育を受けていると思いますが、全員が同じ能力をもっていません。従って、援助する必要がある子供を適切に手助けすることに私は専念します。忍耐強く、全力を駆使して工夫し、最も怠惰な生徒でも興味を惹く教え方を探し、私は事物に働きかける技術者にはないやり方を覚えようとします。どうして間違ったのかを理解し、それを説明しながら生徒を立ち直らせます。私は彼らが平等を取り戻すために働き、生徒を平等に扱いますが、厳しさが必要になりますから自然と職務に反して平等ではなくなります。つまりこの時の平等は、お互いに平等なら良い相対的公平になります。

私は理工科学校を受験する生徒たちを試験します。難しい問題を選びました。そのことは私の武器になり、罠となり、敗者には不幸を齎します。良い成績を与えるのは、少ない人数です。もっと頑張るように。そして、席順を与えます。不平等ですが、それが配分的公平です。

裁判官は、民事訴訟において自由意志をもって職に就いています。訴訟人の一方が金持ちで、他方が貧乏人であるかどうかを知りたいとは思いません。もしも当事者の一人が明らかに騙されていたり、無知であったり、頭の回転が鈍い者であるなら、裁判官はその契約を無効にするか、締結し直すようにします。平等とは、相対的公平のことです。裁判官の権力は、ここでは平等を確立させるためにあるだけです。

その同じ裁判官が、翌日は秩序や処罰を与える者として職に就いています。裁判官は彼ら一人ひとりの行為、知恵、意志、責任を吟味します。裁判官は一方を許し、他方の主張は聞き入れずに、落ち度に応じて無効にします。不平等かもしれませんが、配分上は公平なのです。この二つの機能は必要なことです。しかし、〈配分的公平〉は秩序を目的にした一つの方法でしかありません。それに対して共済的な相対的公平は、それ自身が一つの理想です。つまり全てが正しい意志の目的に適っています。前者の本当の呼び方は〈治安〉になるでしょうし、〈公平〉という美しい名は他にも役立つものになるでしょう。しかし、過去において治安は崇められ嘆願されているのに、公平は既に、今日では無視されていることを私は知っています。宝くじは人を喜ばせます。何故なら、平等から不平等を齎すからです。保険は人を嫌がらせ、気に入ることがありません。何故なら、正に宝くじと反対のことを行うからです。

（一九一二年七月十六日）

百八　平等（DE L’GALIT）

権利とは何でしょうか。それは平等です。或る契約が不平等なものであるなら、あなたは直ぐに、この契約は権利を侵していると気付きます。あなたは物を売ります。私は買います。誰もが交渉後でなければ値段を決めないでしょうし、両者が一致した場合が正当な値段になります。もしも売手が酔っ払いで買手が判事の先生であるなら、もしも売手と買手の二人のうち一方が大変な金持ちで他方が酷い貧乏人であるなら、もしも買手が一人で買いたがっているのに対して売手は他の売り手と競い合っているとするなら、もしも売手が稀覯本とか名人の机とかその物の本当の価値を知らずにいて買手がそのことを知っているとするなら、その様な場合に支払われる金額はその時の都合で決まり、正確な値段ではないと言えます。それは何故でしょうか。その理由は、当事者間が平等でなかったからです。

正確な値段とは何でしょうか。それは公契約の値段です。何故でしょうか。何故ならば公契約の市場においては、値段が公に検討されることによって、買手も売手も買いたい物や売りたい物の知識が直ぐに平等に分かるからです。市場とは自由に議論し検討する場所です。

小さな子供は物の価値を知りませんし、現在の欲求に沿った価値しか知りません。せめて複数の商人が小さな子供が欲しい物を複数の買手に、公衆の面前で提供するなら、小さな子供は最も抜け目ない買手同然になっていることでしょう。そこには法律が支配していて、一スー硬貨を持って陳列されている品物を食い入るように見詰める子供は、最も買物上手な主婦と同じになっています。

ここで良く分かることは、如何にして法治国家は力による自由勝手な勝敗と反対に位置しているかです。もしも力や能力で思う儘にやらせるならば、子供は間違いなく騙されます。例え腕力で子供の一スー硬貨を取り上げなかったとしても、新しい一サンチーム硬貨と古い一スー硬貨が交換されるようになると容易に信じるに違いないでしょう。それは法律ではあり得ない不平等そのものです。そして、正しい法律とは男も女も子供も病人も無知な者たちも、全てが平等でなくてはならないように行おうとすることです。法律の側に立つ者たちが言うのは、不平等は自然の中の事物にあり、それ故に事物は貧しいということです。

（一九〇七年十月十八日）

百九　観念としての平等（L’GALIT, IDE ）

　人間においての平等について私が理解していることは、余りに漠然とした議論がなされていることであり、多分その理由は行為と法律が十分に区別されていないからです。例えば共和国の平等に対して力の点から見ると、男性や女性や子供たちの現実は余りに不平等であり、健康や記憶や学問のことを議論しても全く無駄であると私は思っています。何故なら、卸市場の頑強な男が小麦袋を背にして運んでいても、二歳の子供に同じように運ばせるような法律の発布をしたい立法者は絶対にあり得ない、と私は考えないからです。

　根っからの本質的な不平等、あるいは現実的に十分に眼に見えてはっきりしていて良く分かる不平等はあり、それは力だけが頼りのあらゆる紛争に現れる、と言いましょう。法はそこでは大したものになり得ません。あるいはもっと正確に言うなら、そこでの法は全く何も出来ません。何故なら、一人ひとりは何時も自分が持っている力を各瞬間に出すのでしょうが、それは記憶とか術策とか他人との協調によるものです。この世の如何なる法令も、最強の者が最強になり得ないようにやることしか出来ないのです。

　従って、平等は法の権利であって、事実ではありません。そして、権利ではない事実として現実にある不平等と反対に行くことになります。例えば、もしも王室の子供とか富裕者の子供が市民たちから自発的にお辞儀をされたり、もしも将軍があらゆる武器を手に入れるなら、あるいはもしも司祭が信者たちを跪かせて頭を下げさせるなら、人間には権利という不平等があるのでしょう。しかし、それでもそこには事実として実際に不平等があると言われるこになります。そうです。もしも彼らが自分に権力があると感じると、不平等があるのでしょう。もしも彼らがそのようなことがなく理性的であるなら、そうではないのです。権利とは、私が理性的に判断することです。

　そして、この意味において、あらゆる人間は平等であると私が言う時、それは武力によらずに行動すること、つまり決して力とか知能とか知識とか富とかによって行動を決定しないことが、理性的で正しいことであると言うようなものです。要するに私が決心するのは、決して平和を乱さないことが、戦争の規定を決して運用に移さないのと同じであると言う時です。例えばそこに一本の薔薇の花を持つ子供がいます。私もこの薔薇を持ちたいと思います。戦争の流儀に従って、その薔薇を手に入れるしかありません。もしも子供が反対に護りに入ったなら、私はその薔薇を奪うしかありません。しかし、もしも法律上の権利によって行動するなら、それは子供の力も私の力も斟酌しないことを意味しますし、その子供がダビデと戦った巨人ゴリアテであったとしても、この薔薇を手に入れるために他の方法に固執することはありません。従って平等とは、権利と平和から切り離せないものであり、法による権利に留まっている限り人間の中で完全に存在し得るものです。しかし、不平等が人間たちの関係を規定する役目を果たすと、直ぐに戦争状態に陥ります。そして子供が二歳と十歳で、力があったとしてもお互いに均衡がとれていなければ、不平等は何時も不正や不公平を齎すことになります。

（一九一〇年一月五日）

百十　（平等の権利）

「権利ですか。偽善者よ。恥を知れ偽善者よ。権利とはあるが儘のものである。それは一方では力であり、他方では無力である。それは労働を売る人であり、食うに食えない給料しか貰えない人夫だ、何故なら選択することや備えることも出来ないし、機械なしで働くことも出来ないからだ。寒さに震えて腹を空かせた哀れな男である。動く宮殿である列車がパリからル・アーブルへ行く三時間の石炭の消費分は、十家族が一ヶ月間の暖房に使える量に違いない。そのように考えるのは平等の権利によるからだ。何故、力によるこの盲目的な働きに権利という名を与えるのだろうか。社会という機械はテネリフェ島の火山同様に人間の手に負えないし、溶岩が斜面を押し流して行く。よろしい、それでも良いのだ。そのことを忘れないで置こう。そのことを学校の壁に掲示して置こう。偽善者を倒せ！」。

それは耳の中にぴったりする蜜蝋の耳栓を入れなければ、良く聞かれる議論です。寒い日に建設現場で板に火を燃やしている時、北風が侵入しないように閉じられた部屋に這入るとこのような話が聞かれます。

一年中、正義はなければなりません。それは正義を所有する者たちが偽善を上品にして力を権利に変えると言うことですが、それでは一寸単純に言い過ぎます。今、その〈観念〉を持っているような人間は殆どいませんし、その〈観念〉を持っていなかった如くに生きて行けると思わないことです。愚か者たちはこの〈観念〉に力があると証言します。それというのも下らない頭の中で意見を闘わせないとしたら、何によって彼らは苦しむのでしょうか。良識ある精神は、この闘いも認識しています。要するに行為は十億以上のものが科学や教養のための宝物を注いでおり、それは人間の驚異的な行為であり、〈観念〉の果実です。成熟するまでが遅い果実で、秋に実る果実ですが、それでもやはり熟して落下します。

人間たちはよく困惑します。所有権がはっきりするまでには一世紀近くかかり、〈理性〉の光によって習慣を修正しながらこの複雑な機械や工場を予想することはなく、町の発展や濃縮された生産や資本力を予想して備えることはありません。所有権は大変な賢明さと正しさを表していました。それは〈理性〉という〈観念〉でした。この観念は今は他者と共に自分自身と戦います。それは予見出来ないことであるのが分かり、所有権は所有権に反対することになります。何故なら資本家は自分の全労働生産について権利を所有し、労働者にはもう全労働生産についての権利がないからです。権利は権利を失墜させます。何故なら一連の均衡のようなものを生むために働くや否や、〈国家〉は一方を取り上げて他方に与えるようなもので、権利の名において権利を侵しているようなものでもあるからです。そこから要求されているのは精神に誠実になることであり、抵抗することでもある精神の誠実さです。〈進歩〉は具合が悪いものに繋がっていて、出番はありません。事物と観念は闘っており、激しく抵抗しています。「はいどう！　はいどう！」とそこで声を出して鞭を打ちます。しかしながら、もしも大地を開墾したいのなら、事物である車輪付きの犂を上手に押して行かなければなりません。

（一九〇九年十二月五日）

百十一　（社会主義者の革命）

労働組合運動の活動家たちは（彼らが最も熱心な社会主義者であることを私は明言します）、最近その思想に大きな変革があったように感じていたように私には見えますが、それは新しい局面で人間の進歩が考察されていることです。そして以下は、私が如何にこの思想の変化を想像しているか、そして如何にその変化が政治に齎すものかをおおよそ述べたものです。

社会主義者たちが考えたことは、先ず権利という概念から出発しました。彼らにとって、食うに食えない給料のことを考えると、高齢の労働者たちは救いの手のことを考えるようになり、人格は物のように扱われ、権利と密接に結びついて行ったのは明白なことでした。そして、演説や協定によって誰にでも説明して、大変な成功を収めました。何故なら進歩した認識や反省されて見直された慣習は、精神を広げ、金持ちでない者も金持ちと同じように良いことであったからです。十九世紀には一つの正義の波がありました。そこから資本家たちの権利に関して世界的な懐疑が生まれたと言えるのですが、それは知識人たちの衝撃のようなものとなって世界中に広がり、そこから慣習や法律において沢山の変化が生じましたが、その多くが受け入れられています。要するに、例えどんなに少しでも学問に接したことがあるなら、金利生活者の中で最も力がある者でさえ、有罪の宣告を受けるか、わざと両眼を塞いで全てを白紙に戻すか、自分自身の無為や他人の貧困を余り認めない方が良いのです。従って晩年のソクラテスは多くの希望を幾何学に持ち、正義の線を引きました。それはイデオロギーによる復讐でした。

しかし、十年前に起きた運動を見て、どんな風に準備されてきたのかを知って下さい。マルクスは権利を力に帰し、正義に望んだのは予期できない雪崩と同じ盲目でした。歴史家たちの軍隊とは、半分がイエズス会士であり、半分がエリート学生のような者で、思想もイデオロギーも馬鹿にして、あらゆる知識を何よりも有益であろうとする信仰に帰すことを熱望しましたが、理性的ではありませんでした。労働者は、この批判を神学に対する不信によって形作るようになり、神々と同時に右翼思想と観念的な理想を追い払いました。私は身近にそれを眼にしました。右翼の友人たちが右翼を馬鹿にするようになったのを私は見ました。

ところで、彼らがブルジョアの社会主義者を信用しなくなったのも、この紆余曲折があったからです。何故なら、もしもこの世の享楽への欲求や力が全てであるなら、人間が社会主義者になって良く生きることは不可能になると考えたからです。それ故に、ブルジョアの話は策略でしかありません。それ故に、身を守るために武装して奴隷解放の戦いを起こさなければなりませんでした。鈍重な人間は右翼が嫌いで、そのことを隠そうともしません。

間違った考えは遠くへ行きます。社会主義は王位を奪われます。情熱というものが回復されます。若きブルジョアは、今まで持っていた正義という思想を恥ずかしく思い、顔を赤らめます。党派の強さが今までにない程、大きな声で語られます。最早信じるものは力だけです。〈社会の戦争〉は思想を無視します。ブルジョアたちは金銭の入った財布をしっかりと握りしめます。顎髭を生やした急進社会党員の老人は、今はもう何もやりません。一言で言えば、革命の展望は排除されています。その理由は、力としての社会主義とは何か、知性がそれを至る所で保証して共犯者がいない社会主義とは何でしょうか、ということです。それは何でしょうか。パリの町の交差点は騒々しいのですが、警察隊員たちにがっちり固められているようなものです。

（一九〇九年十二月三一日）

百十二　（復讐）

プラトンは、人々が選択した罰とは別の罰を余儀なくさせたくありません。正義は、ここでは必然性という形を成しています。けちな人はお金を貯め込むにつれて、更にけちになります。そして、恋をしている人は新しい愚行を知るにつれて、更に恋心を強くします。怒り狂った狂暴な人は叩くにつれて、更に狂暴になり、羨望する人は自分の身近な不幸を考えるにつれて、更に羨望するようになります。従って彼らは自分が望んだのですから、この罰から逃れることが出来ません。私がヘーゲルに見出すのは荘厳な思想家であり、良識に近いものばかりですが何時もそれに気付くものではなく、その労苦は付随的で表面的では大衆的安全を考えての思想であり、もっと奥深いところでは罪の意識と同じ結果のものがあります。平凡な判断に包まれている思想は、その度に次のように言われています。「それで良いのだ」。あるいは「それを望んだのはお前なのだ」。

そこから齎されるのは、恐らく大変に古くからある思想で、苦労は正しいというもので、その時その苦労は罰したいとさえ思う行為に似ています。「お前は天に唾する」という諺があります。しかし、私たちの行為は何時も自然法則によって私たちの上に再び落ちて来るようなものではなく、古代の人々はそれを曲げて熟考して判断します。あなたの矢は隣人の眼を潰しました。私はその矢をあなたに返します。あなたが六頭の羊を盗んだのなら、六頭を失うことになるでしょう。あなたが彼の息子を彼に殺させるなら、あなたは自分の息子を殺すでしょう。最後の例でお分かりのように、観念は大変にいい加減です。しかし、観念は大変に自然であり、それによるなら復讐は正義のための義務のようなものです。その上、法を犯されて絞殺された少女の父親は、何よりも先ず犯人がギロチンに架けられるのを要求するようになります。そして、それは与えられます。純粋に残酷であるということは、恐らく余りに自然を超越しています。それは宗教のような感情であり、それを否定することは英知というにはいかにも不十分です。各々の間違いの中に真実を発見しなければなりませんし、結局のところそれが自然に満足する方法でもあります。

例えば死刑において、現実の事実の流れに従った人殺しの行為が見分けられなければなりません。何故なら人間としての生活を重んじなかった者が有名になるや否や、長持ちしないからです。彼の道は限定されます。他人との交際関係が確立して、際限の無い暴力を閉じ込めます。セネカは言いました、「あなたの奴隷がせめて自分のものを賭けるようなら、あなたの人生も思いのままである」。しかし、このような状況はあらゆる犯罪にも言えることです。それ故に殺人が死で罰せられるようにしたいなら、裁判官がそれをやる必要はありません。裁判官や社会性というものの役割は、社会の利益を正しく考えることです。それ故に、彼らは熱く激しい復讐に反対します。それは不幸の源泉であり、狂暴の学校であり、恐るべき喧騒であるからです。行為を決定し、復讐行為を規定化することです。しかし、良く見詰めるためには、罰する人になってはいけません。暴力は法の力だけで行われるべきです。それ故に陪審員が厳しくなったり、寛大になったりするのは、賢明なことではありません。彼に宣戦を布告した者との争いの結果に、単にけりをつけるだけです。彼には罰する権利はありません。罪を許す権利を何処に持っているのでしょうか。

（一九一二年八月二十日）

百十三　死刑　（LA PEINE DE MORT）

死刑は暗殺者を怖がらせないと主張することは、良識に逆行します。もしも何らかの罰があるとするなら、その力は何よりも恐るべきものであると言わねばなりません。刑は違法行為に対して何も出来ないとあなたは主張するのでしょうか。経験が何時ものように応えてくれます。小学生たちは元気がありますが、忘れっぽくもあります。話をして笑いからかうことは、彼らには自然です。彼らが集団化すると、再び野生に戻り、一生懸命綴りを教えてくれる人の良い人まで時には馬鹿にします。甘くすることに気を付けさえすれば、何か少しは厳しい罰則で直ぐに秩序と平和が回復して、良い子になるのを誰でも知っています。犬や馬なら鞭の一振りがあります。しかしながらそれらは動物です。ライオンでも言うことを聞かせます。ところで人間には誰でも仕込むべき馬がおり、犬がおり、ライオンがおります。それなのに何故あなたは、懲罰が分別の助けにならないで欲しいと思うのですか。

私は死刑に欠けているものをよく知っています。それはまさしく鞭の威力のことであり、苦痛の記憶です。その苦しさによって罪の記憶に結び付き、鞭のことを考えなければ最早一度も罪を考えられないような罰を受ける者になることです。このメカニズムによって罪は、それまでと同じようには最早魅惑的ではありません。欲望は恐れによって鎮まります。犬が焼肉の臭いを嗅いでも触れずにいる理由がそこにあります。ギロチンは、ギロチンで殺された者たちを教化しないのは余りに明白です。この考えは終身刑には意味があることになり、そのことも忘れないで下さい。

人間が如何にして作られているかを理解しなければならないだけです。人間は動物よりも遠い将来を予測しますし、予測して発明することが出来ます。そこから情熱が生まれます。人間は、前日の経験によってはっきり分かった多くの欲望によることよりも勝手に思い描いた希望によって、極めて稀ですが悪い行いに向かいます。吝嗇、恋愛、野心は蜃気楼のようなものです。決して所有したことがなかった幸福を味わうために、人は盗みを働き、をつき、人を殺します。そうです、ギロチンも蜃気楼です。

私は、暗殺者のナイフが振り上げられたその瞬間に、ギロチンの効き目が働くとは思いません。ギロチンは眼に見えますし、未来を遮断しますが、丁度それは暗殺者がナイフを購入する時であり、今の幸せよりももっと幸せな人生を前もって自分で作ろうとする時です。大統領の仁慈や法務大臣の話が岐路に立つ冷笑家たちに最大の力を与えるのだと私は確信していますが、それは彼らが魂を買うために探し回っている時です。彼らは死をそんなにも恐れている訳ではありません。しかし、死を待つ日々があり、身繕いをして、死刑台の階段があります。想像力を働かせて利益とリスクを考えるから、その恐怖によって恐くなってくるのです。

（一九〇八年十一月二一日）

百十四　乗船客たち (LES MARINIERS)

木陰の美しいトンネルがある運河、芝生が植えられた土手、水門がざわめく運河は、生き生きとした感情が目覚め、その中から詩が生まれますが、それは多分自然という装身具を纏った人間が創った作品であるからです。この水門という装置は驚くべきもので、単純で、力強いものと考えられています。水門が丘の高さへ重い船をだんだんと持ち上げていき、花々で飾られた家や自由に遊ぶ子供たちのために働いているのを誰が気付いているでしょうか。誰でも望んでいたのはヴェルギリウスが言っていたように、押し寄せて逆巻く幾つもの波を船が真っ二つに切って進み、船内の廊下を行ったり来たりする人の音も静かなゆったりとした旅でした。鞭を打つぱちっという音がします。二頭の馬が巧みに順序よく綱を引っ張って行きます。水平線は、時々刻々に滑っていくようです。花々や牧草は過ぎゆく船にお辞儀をして挨拶しているようです。幸福なる乗船客たちよ！

私は舷灯が灯る頃に、この夢のような光景の続きを見ました。既に、その時は半月が殆ど大空の真上に来ていました。私は水門の脇にある宿屋に這入りました。錫製の皿やテーブルが光っていました。猫が一匹眠っていました。しかし、直ぐに動き出しました。ドアを叩く音がしました。乗船客たちが這入ってきました。若者たちもいれば、老人たちもおります。煙草を吸っている人、アブサンを呑んで酔っている人、興奮して話をしている人たち、道具を持っているように手を動かして妙案を次から次に言っている人もおります。或る老人は言いました。「出帆の時刻を待っているのじゃ。叫んでも、叩いても仕方ない。なるようになる。馬を選んでからじゃ」。別の者が次のように言いました。「何も働かない馬でも一頭に水が六リットル必要だが、働いている馬たちには各々一度に五リットルの水が三回必要になる。そして、同じ量の干し草を欲しがるからな」。三人目の人は次のように言いました。「私の騎兵隊の馬を戦わせる時は、鞭を二回も打つ必要はない。馬は直ぐに私の気持ちを理解してくれるからな」。

その場には挑発的態度の人々もおりました。「あなたは私の船に乗れ。私はあなたの船に乗る。そして、前進だ。私が今日あなたの後について行ったように、もしもあなたが私の後についたなら、どちらが上手いか分かるだろう」。別の人が言いました。「何頭もの馬をその儘同じ格好にして放って置くことは、恥ずかしいことでやってはならないことだ。ほら、首輪で傷付いているではないか」。しかし、他の人が次のように答えました。「私は決して自分から命令しない。言われたことをやるまでだ。与えられたものを与えるまでだ。叩けと言われれば叩くまでだ。私の信仰は全てが聖者のためにあり、そしてそれが正しいことなのだ」。別の人が言いました。「信仰が厳しいのはベルギーだ。馬の頭を鞭で叩いてばかりいて、そうなるとあなたはやることが沢山あって忙しいでしょう」。別の人が次のように言いました。「それを言うならプロシャの方が厳しいよ。馬の肩口が傷付いたことで、私は憲兵に三日間足止めをくったからね」。フランスの警察官は決してそんなことをしないことを、彼らは皆知っています。鉤鼻の凄い口髭を生やした男は、次のように言いました。「先ずやらねばならないことは、馬が働けるように餌を確保しなければならないだろう。十二リットル以上は必要だ。そして、傷付いた馬は休ませなければならない。獣医に診せなければ元気にならないだろう」。この言葉に皆が賛成しました。誰ももう話をしなくなりました。誰もそのことを考えなくなりました。実際の光景を見ることや行為や思い出には、何と強い説得力があることでしょうか！

国王の存在は人々を支配するためのものです。そのためにはアブサンで人々を酔わせることしか必要でありませんでしたが、偉大なる人々は馬たちの権利についても議論していたのです。

（一九一二年三月八日）

百十五　個人と社会　（L’INDIVIDU ET LA SOCIT ）

個人主義者は、急進主義の基礎になっていて、あらゆる所で攻撃されます。君主制擁護者や社会主義者は個人主義者を軽蔑しますし、社会学者も公正な科学の名において同じように軽蔑します。そのことが齎していることは基本的には遠近法の逆転で、社会学者たちは至る所で私たちを元気にさせてくれることでしょう。原始時代の人間は孤独であり、法事も道徳観念もなく、多くの動物がそうであるように個々の必要性に従って生きていたと長い間信じられていました。文明は他の何者でもなく、その時の社会の歴史もこれと同じです。人間は必要性によって契約を尊重することや誠実であることの価値を学ぶに応じて、良心的にきちんと話すことの美徳や正義や弱い者の権利や慈愛や他人を尊重する精神である友愛が生まれると理解してきたのだと思います。それ故に何よりも市民として生きること、動物的な生き方からだんだんと逃れるために沢山の言葉の意味に細心の注意を払って他人と一緒に思考し行動すること、そして人間の本当の仕事を生むことしか重要ではなくなるようです。

思考や行動が厳格な共同体になっている蜜蜂や蟻の社会が存在することは考え直してみなくてはならないでしょうが、そこでの国家的安全は打算や偽善もなく崇められ、進歩や正義や慈愛がある訳ではありません。しかし、社会学者たちが多くの資料で十分すぎる程立証してみせたことは、知れば知る程、原始時代の人間は階級制度や習慣や法律や規則や儀式や、厳格な奴隷制度の中で個人を拘束する手続きと共に、社会が形成されていることです。もっと正確に言えば受け入れられた奴隷制度は宗教的に崇められたものです。しかし、それでは一寸言い過ぎです。個人は自分自身のことを考えていません。個人は全体から分離しませんし、そのように考えませんし行動も取りません。個人は社会集団の中にあり、私の腕が私の体と結びついているように社会集団と結びついています。宗教上の言葉は、絶対的な一般的思想を表現するのに大変不具合でさえあり、あるいは絶対的な一般的な生活は、母親が脇に子供を連れている間も子供が母親と区別される以上に、都市と市民ももっと区別されます。或る思想家は言いました。「ヒースが生い茂れば何時も広野になるように、人間は何時も社会的です」。

そのようなことは見抜けるかも知れませんし、それを実際に知るのは更にもっと良いことです。宗教や群を作る社会的本能の力が理解されますが、それ故に最も強く結びついた社会は、科学、発明、力による征服、地球上で人間の支配を確かなものにしたもの全てに似ているあらゆる力を拒絶します。そして、この依存状態の中で人間が一人ひとりきちんと話をすることは決して悪いことではなかったのは極めて真実ですが、社会はそれらを全て持っていると言えます。何故なら社会は意識や良心のない動物のようにも行動してきたからで、そこから戦争や人間の犠牲が生まれましたが、それは人間の蟻塚であり、要するに人間という蜜蜂の巣です。そして、それ故に進歩というエンジンが、一人ひとりの個人の中にある何かの反抗心が存在しなければなりませんでしたし、自由な思想家という者の中には恐らくその炎が燃えていたことでしょう。ところが社会は何時も力であり、盲目です。何時も戦争、奴隷制度、迷信を固有のメカニズムで生んでいました。そして、〈ユマニテ（人間性）〉を取り戻すのは何時も個人の中であり、残酷さを取り戻すのは何時も〈社会〉の中です。

（一九一一年四月十七日）

百十六　死者は統治する　（LES MORTS GOUVERNENT）

「死者は生きる者を統治する」。これは色々な意味において真実です。あなたは丘の斜面で立ち止まって下さい。大変気楽な服装で斜面を注意して見て下さい。ここにはライ麦の銀色の光が輝いています。遠くには密生した草とひなげしが見えます。長方形の模様や木々の茂みがあり、道もあります。それらは大変になだらかな斜面にありますが、それらの色彩の変化というものは床土によって十分説明されるのでもなければ、水の流れによるものでもありません。それらの色彩の境界を示したのは歴史です。開墾、相続、分配、争い、裁判、判決がありました。死者たちのことは全て忘れられています。勿論、牛たちがここで動き回っているのは、死者たちの行動のせいではありません。上空にある大空は、刻一刻と変化します。風や水蒸気が動き回ります。今ある力が動かしているのであり、思い出はありません。

村や町には、その他に思い出すものがあります。古い家が通りを塞いでいます。十世紀という時間が過ぎ、路地の形状に合わせてそこから移動させねばなりません。産業によって人間は通りを変えます。古い壁は邪魔になり、そこに別の力が働きます。教会は岬のように突き出ています。記念建造物と同じです。古い家は梁が組まれ、彫刻が素朴に施され、生き生きとした表現力で保存されています。ここは死者たちが統治しているのであり、あるが儘の力や石の重みによるのではなく、古い家が表現している明晰な言葉と説得力によるものです。生きる者たちはそのことに気付きます。それは生き続けている信仰心であり、それに反対するのは石ではありません。

法律、書物、学校、伝統と学習をもっと良く見て、生きる者たちは選択します。そして、この選択する力が一つの遺産でもあります。それは最も貴重であり、個であることが崇められるに違いありません。この磨き上げられた石の中で、私たちは人間らしさとその工夫を知るようになります。人の真似だけしかしなかった者は軽蔑されます。芸術作品は、革新者や改革者の意志による新しい思想で自らを助けます。大聖堂が主張してきたのは平和と正義であり、結局のところ純粋な必然性とは別の秩序です。大聖堂が教えてくれるのはそこの処です。人間としての義務を思い出させてくれます。よく知られているようにどんな想像力も々私たちを騙しますし、全てが古くからあるものの方へ思いが行きます。しかし、美的判断力は私たちを立ち直らせて次のように言います。「其処にあるのは一つのコピーであり、コピーのコピーで奴隷の作品だ。しかし、此方の作品は自由が輝いている」。伝説が私たちの心を惹きつけるように死者たちは墓場へ引き寄せることはありません。死者たちは、私たちが生きること、思考すること、改革すること、動物的力に抵抗することを、彼らの手本に倣って助けてくれます。教会の薔薇窓は明らかに幾何学模様です。私がそこに見るのは、円形となって集まる者や立法者としての自分の生涯です。憎悪、悲しみ、戦い、不正、憂鬱、絶望を習うために墓場へ行く者は、無駄に往復します。これらの悲しいことの中では、一人ひとりが主人です。反対なのは慰めや希望や将来を作るための意志であり、私たちの信仰心や遺産がそこにあります。

（一九一二年六月二一日）

百十七　伝統主義　（TRADITIONALISME）

伝統主義は、同じ歴史によって押しつぶされます。それというのも、例えば犯罪者教育の方法として、拷問の復活は誰も提案しないからです。蒸気機関の発明は、伝統的な労働や年季奉公を変えました。仕事場は大きくなり、仕事はより厳しく辛いものになりますが、作業の難しさは少なくなります。あなたは昔のお礼奉公を復活させるでしょうか。当時は労働で負傷した労働者は、理不尽な搾取に遇っていた時代でした。それが当たり前でした。手仕事でした。今はベルトや電線が至る所に走っていて、それが理不尽な搾取を行う資本家という主人であり親方です。これらの新しさが生まれる源は、最も古い伝統と同じです。発明はそれが如何なるものか、実際の状態を解明し調整して合わせます。さもないと一瞬たりとも生かされません。

フランス革命は何かの結果であり、何かの継続です。王に敬意を表するのは人民のパラドックスであって、王が正義であったからではなく王は過去にいたからですが、今はおりません。現在あるものを堅く信じることや批判を推し進めることは、想像力の効果でしかありません。それは道徳的判断の結果であり、汚職者、独占者、フランス革命以前の徴収請負人の考えを断じて批判することです。柏の木の下のサン・ルイ島の伝説は美しく、私はそこに訴訟人たちが既に平等であったことが分かります。〈呑気な粉屋〉の寓話も美しく、王は二人の訴訟人の間で判決を下しているのが分かりますが、決して一人の訴訟人と王自身の間で判決を下してはおりません。この考えは幾つもの時代が土台になって齎します。

キリスト教は一つの革命でした。根となるものが無かった革命であると言えるでしょうか。それは想像力に対しての道徳的判断力の爆発でした。異教の神々には長い歴史がありました。他人を尊重する友愛も同じようにありました。良心に照らして〈神々〉の言葉を翻訳しなければなりませんでした。プロテスタントはこの種の活動を強調します。革命と同じです。社会主義も同じです。あらゆるものが科学の進歩や産業の発達によって私たちの回りで変化する時、想像力は何時も愚かなものを生み、賢明というものが習慣の中で眠って仕舞っているのが明白である時、何故あなたは最早修正を行うべきでないと言うのですか。確立された力に抵抗することが歴史というものではないのですか。その思想によって少なくとも思考すること、それが人間ではないのですか。そうでなければ、むしろ動物なのではないでしょうか。つまり死者たちは生きる者たちを統治しています。しかし、死者たちは手本にして貰いたいのでしょうか、あるいは生きる者たちの心の中で生き続けたいのでしょうか。過去において、あるいは過去の人間においては服従と反乱、習慣と発明があります。どちらを私は崇めなければならないのでしょうか。死者たちのための私の信仰は、何故圧制者たちというものに向かうのでしょうか。ジャンヌ・ダルクはそんなにも早く諦めたのでしょうか。ルソーの祖先は、ルイ十五世よりも少なかったのでしょうか。

（一九一二年六月十九日）

百十八　自然の連帯　（SOLIDARIT NATURELLE）

〈連帯〉とは、一角の人物にとっての〈必然性〉です。それが私たちを押したり引き止めたりするのは、良く結束した息子たちであり、共通の危険があるからであり、他人を模倣するからであり、自分の意志以上に強い共感があるからであり、近所付き合いが長くなっても連帯感というものは強くなります。私には家族があり、町があり、国があり、人種があり、逃れようとしても無駄です。私は亀のように家を守ります。

その上で話したり書いたりする者たちは、この奴隷状態に十分な注意を払わず、最も自由な思考までを甘受しています。高潔な意志を連帯という言葉によって理解したいと思っており、束縛と義務を選択します。「私は立派なロシア農民と連帯します。私の隣にいるアルコール中毒になった乱暴者とは連帯しません。全ての国のプロレタリアと連帯するのであり、自国の有閑階級の人々と連帯するのではありません。正義の人々と連帯し、不義の人々と連帯しません。私は自分が望むようにやるのであって、他の人が望むようなことはやりません。人間としての連帯がそこにあります。その他は動物でしかありません」。

良く見るならば、他の人にも多分正義はあります。何故でしょうか。連帯は人を選ばないからです。「お互いに似ている人は団結します」。この団結は故意のものであり、特権階級や階層を生み、終わりのない闘争を生みます。本当のことを言えば、私に似ていることは私を必要としているのではありません。私もそれを必要としていません。私たちはお互いに妨げ合うでしょう。というのも共通部分は必然的に増大するからで、私はそれを請け合います。同じ例、同じ話、共通した同じ行動は幾つもあり、それらは全てが一つの考えに導かれ、狂信的な情熱を生みます。同じ職業で結び付いている自分たちの声のこだましか聞かない労働者たちは、怪物を生むことになります。資本家たちも結び付いて怪物を生むことになります。軍人たちも同じです。アナーキストも同じです。警官も同じです。盗人も同じです。集団のこの厭らしい精神を返して何かの行き過ぎを選別し、そして美徳を思い出さなければなりません。そして、各々の集団が強固になればなる程、内部の正義は集団外部の人々に対しては正義ではなくなります。平和という希望がなくなります。盗人が生きねばならないのは、正直な人間と一緒でなければならないでしょう。二人ともそこで報われることでしょう。結社においては、隣人との対照にしか立派さはありません。でも自然は肯定も否定も合わせます。それらの結合が平和を生み、戦争を回避させました。私は〈教会〉という集団が嫌いです。

子供たちを育てるのは〈自然〉であり、人間であり、〈ユマニテ（人間性）〉です。私は家族の一人です。私の父は怒りっぽいのですが、私は愛しています。私たちは共に生きねばなりません。そして、それが私たち二人にとっての最大の美徳です。私は金持ちに成ります。哀れな年寄りと別々の部屋を持ちますが、父にも私にも良いことです。母には大きくなった子供たちと歳が離れた一人の男の子がいます。彼女はその子を愛し、助けます。彼女にはその方が良く、拘束されていることは彼女も同じです。祖国とは偶然に生まれた娘であり、フランドル人とナルボンヌの人々が結び付き、そしてブルターニュの人々とランシュ・コンテの人々が結び付いて生まれました。私は見知らぬ人々と結び付けられています。彼らにとって良いことは、私にとっても良いことです。私はアカデミーに入らなくても、そこで知識を手に入れます。画家の集団は画家にとって悪いものです。音楽家の集団も音楽家にとって悪く、代議士の集団も代議士にとって悪く、無知な人の集団も無知な人にとって悪く、博愛家の集団も博愛家にとって悪く、モラリストの集団もモラリストにとって悪いものです。それらは自然との絆がゼロであり、自然との関係は偶然であり、自然と対照をなしており、多様性、混合、近隣、拘束が大地から生まれ、人生の根源になります。正義は大地から生まれます。

（一九一〇年十二月九日）

百十九　ストライキ (LA GRVE)

その都会人は、杖で大地を叩いて言いました。「そうだとも、私たちは世界中の奴隷制度に立ち向かって行きます」。私たちが座っていたテラスからは、谷のすべてが見え、太陽を飲み込んでいるようでした。草取りがなされ、大地は鋤で掘り起こされ、四角い庭園のように区画された小さな平原が幾つも私たちの眼下に広がっていました、豊かな大地の色は褐色、赤味がかった黄土色、黄色、青味がかった灰色をしていて、あちらこちらに爆発したような緑色の断片が散らばっていました。時々、人間の叫び声、牛や馬を繋いだ連結具のカチカチいう音、小石を叩いたときに工具が発する甲高い音が聞こえてきました。しかし、その都会人は何時も郵便局員のストライキに立ち会っていました。

彼は言います。「そうだとも、私たちはお互いが非常に依存するところまできたので、人間の自由も友情も最早なくなるだろう。私たちが必要とするものは、各々が既に郵便や照明や水洗装置がそうであるように、分配人機構とか清掃機構とかいうものの奴隷になることだろう。私たちには現在、食物が輸送されていますが、それは会社や同業組合によって食糧が供給されているからです。ストライキという脅かしは、死の脅かしになるでしょう。ストライキで防御することは、攻撃することと同じ種類のものであると予め心得て置くべきで、恐ろしい懲罰を覚悟しなければならないでしょう。労働者集団による拒否は、戦争による反撃が必要とされる戦争行為にもなるでしょう。一人ひとりは各々が依存されており、私たちは恐怖と奴隷制度の中で生きていくのでしょう」。

私は彼に言います。「恐怖と奴隷制度の中では長く生きられません。人はうまくやっています。この村の家々や大地を動き回る人々を見てご覧なさい。ある意味で彼らは鶴嘴や鋤で訳もなく私を殺すことが出来ます、もしもその考えが彼らに齎し、その恐ろしい考えが制止されなければ、それは恐るべき動物です。あなたには、それと同じ力があります。何故ならあなたの力は強いし、鉄具の付いた杖を手にしているからです。それにも拘わらず私はあなたや彼らとともに平和に生活しています。私は、あなたの良識や彼らの良識を当てにしています。私がその生活を愛するのと同じくらいに、彼らは安全を愛していると思います。文明人は水の確保次第で如何にでも成るのは本当です。もしも世界中の水が飲めなくなったら、私たちは久しく平和のことを口にしなくなるでしょう。もしも人間がすべて無分別に狂えば、最早疑問も持たなくなるでしょう。私は人間性を信頼していると敢えて言います。働く人々は給料が上がることを強く望んでいますし、そのために団結しますが、それを見て私は決して脅えません、びっくりすることもないでしょう。それはライ麦や小麦が生えてくるように、自然に生まれてくる〈道理〉です。同様に郵便局員たちが同時に不平等を容認しないと主張していますが、良く見てみると、そのことは私には慰めそのものに思われます。私が愛していることは、専制君主制は最早私たちの社会では不可能であると認めることです。しかし、もしも大部分の男たちが他人や自分のために不可能な生活を取り戻すために共謀するとあなたが仮定するのなら、彼らが鋤いたり掘ったりしている人であるなら自分の鋤や鶴嘴でお互いが突然に叩き合うと仮定しても可笑しくないと思います。人々は平和を望んでいます。それは人々がシャベルや鶴嘴を使って耕した、あそこの畑に四角く書いた緑や褐色や赤と同じものです」。

（一九〇九年四月十八日)

百二十　（愛と宗教）

そのモラリストは言いました。「人は自分が望むものを余りに容易に信じ込んでいます。愛は全てが幻想に見えます。心の炎はあらゆるものを着色します。愛されている人は誰にも親切です。あらゆるものを理解しています。〈美貌〉〈詩情〉〈健康〉〈英知〉が揺りかごの妖精となって身に付いています。人民は正しくて善良である、と人民の友人も又気楽に信じています。そして、それは〈神〉がいると信じる宗教心と同じメカニズムによるものであり、もしも〈神〉はいないと信じていたとするなら、その様に感じるに違いない苦しみによるものです。従って全ては推して知るべしです。さもないと人は、決して行動することも、生きて行くこともないでしょう。真理はどぎつい光を放ち、人間という植物を大変に生き生きとさせます。他人が間違っても他人を尊重しましょう」。

賢者は次のように言いました。「しかし、間違いのことを余りに性急に話しているように思えます。私たちの愛は何も変わっていない多くの状況があることを私は知っています。私は日食を望むことも出来ますし、あるいは単に穀物が覚えているに違いない美しい太陽を望むことも出来ますが、それは叱責したり悲しみに泣いているような嵐ではありません。私は敢えて望むことが出来るのは、最後は物事が私の望むようになるだろうと希望することであり、信じることです。しかし、それは自分流のやり方で進展します。そこから私が良く理解出来ることは、祈りは愚かなことであるということです。そして、私の兄弟の人間性とか姉妹の人間性に関わる時は、全てが変わります。私が信じるものは々最後には真実になります。もしも自分が嫌いであるなら、私は嫌われることでしょう。愛も同じことです。もしも私が教えている子供に学ぶ能力が無ければ、私の考えや話を聞いて書かれた信仰や信念は愚かなことに帰すでしょう。反対に、私の信仰や期待は太陽のようなもので、花が咲いて成熟し、善良な人間という果実になるでしょう。私はあなたに敢えて言うのですが、私が愛する女性の美徳は決して彼女にはないのです。しかし、もしも私がそういう女性であると信じていることを彼女が知れば、彼女はそういう女性になるでしょう。多少なりともそうなることでしょう。しかし、それはやってみなければなりません。信じなければなりません。国民を軽蔑すれば、直ぐに国民から軽蔑されることでしょう。そのことを弁えれば、評価は上がります。不信や疑念は多くの泥棒を生みました。半信半疑は罵詈雑言のようなものですが、もしも私があらゆるものに信頼を与えるならば、誰が私を裏切ることになるのでしょうか。先ずは与えることです」。

社会学者は言いました。「ところが如何なる経験によっても、人が信じるようになっていったのは、大きな信頼でしかない祈りが事物の秩序を変えるからです。何故なら、それは人間に係わることにとっては本当であるからで、その始まりはあらゆることが人間に係わることとして関係していたからです。そして、〈神〉を信じたいと思う者が、最早決して疑わないと思うまで自分自身を変えるのは常に本当です。もしそのことをそうあらねばならないこととして要求するなら、恩寵が齎されるのも本当です。しかし、人間の心の中の奇跡は、人間の心の中しか変えません。あなたの祈りは日食のように決して不完全に欠けてはいませんが、決して〈神〉が存在するということにはなりません。只、日食は存在しないことが確認されます。でも〈神〉がいないということは確認されません。以上は、宗教に力がある理由になっています」。

（一九一二年八月十一日）

（次章へ続く）

百二十一　書く自由は、絶対的か？（LIBERT D’CRIRE,ABSOLUE？）

言論の自由は、際限のないものではあり得ません。或る時はプロパガンダ（宣伝）のために、又或る時は他のために、一つの権利のようにそれが要求されるのを私は知っています。しかしながら、際限のない権利はないということもよく分かっています。そういう権利はあり得ませんし、少なくとも自由でもなければ争いでもない状況に位置しておりません。そこで良く言われることは、あらゆる権利が与えられているが、そこでは現在の自分自身の力によって出来ることしか所有していないということです。しかし、他人と共に集団を作るや否や、一人の権利と他の人々の権利は均衡を取った制度を生みます。全ての人にあらゆる権利が可能であると言われることは絶対にありません。全ての人が同じ権利を持っていると言われるだけです。そして、この平等の権利が恐らく、正義を生むのです。何故ならそれらの状況は少しの制限も無く権利を生むことを決して許していないからです。例えば皆に共通した利益になるから、通りを遮断しないなどと言われることはありません。単に正義が必要としていることは、皆のためになるなら通りが遮断されることもあり得るということです。それ故に市民として要求されるものを私は良く理解しますし、それを身に付けたいと思うあらゆる力と共に、他の市民たちが楽しんでいるものを知るのも権利です。しかし、際限なく権利を望むことは具合が悪いことが訪れることにもなります。

形而上学は忘れましょう。何の条件も望まずに言ったり書いたりする権利を人は持ち出します。私は、疑問が全くのお門違いであるために、そのような権利が許されないのが明らかである場合を示すだけです。ところでその場合は、大変に遠回りしてそれを発見する訳ではありません。猥褻な文章や話は許されるものではありません。少なくとも子供たちは何時も守られていて欲しいものです。何の規制も無く話したり書いたりする権利に、この制限が疑問を挟むものでないのは十分に理解されることです。

このことは先ず最初に驚くべきことです。何故なら私たちは何時も抽象的であるが厳格な何かの原則や基本を望んでいるからで、それは人間憲章の条項のようなものです。本当に私はそのようにはっきりと表せる権利しか理解しません。それは平等な権利です。この状態は充実しており、権利というものは検討すべきものであり、人は最も明白になっている権利が削られる状況を想像することも出来ますが、人生にあってはそれも同じ権利です。それというのも人命救助の時は、危険な持ち場にいないことを権利として言わないからで、同じ状態になれば、只単に全ての市民は等しく救助を続けることになるでしょう。

話したり書いたりする言論の自由の権利に戻りましょう。それは少なくとも良き品行によっては制限されません。国民の安全や秩序によってその権利があります。犯罪とか盗みを公然と称賛する権利は、私にはありません。例えば、礼拝は決められた状態の下でしか自由がありません。古代人を真似てバッカスとかヴィーナスを崇拝することは想像出来ますが、古代人がそれを禁じていることは大変に良いことだと思います。ルソー、モンテスキュー、ヴォルテールの寛容な作品を読む時、最初に先ず驚くことは、この主題について彼らが慎重であることです。何故なら教義が無害でなければ寛容も望まないからです。そして、教義が無害でないかどうかを知ることが重要である時、それを決定するのは法律や裁判官が作る世論です。しかし、至る所にある間違った観念や知識は、何処からやって来るのでしょうか？

（一九一一年二月十四日）

百二十二　（表面的自由）

　シヨン運動家（１）の若い友人が万用暦をくれました、但し、お金は払いました。何故なら私は他人を犠牲にして金持ちに成りたくないからです。パンフレットになったこの暦から、大新聞が財界人に支配されているのが分かり、素直で自由な意見が生まれてこないようにさせられているのが分かります。それに反して新しい新聞は、読者にも制作者にも誰にでも高潔で、本当に自由な新聞になるでしょうし、思想も自由で、表現も自由であることが分かります。

私はこの崇高な計画に賛成します。少なくとも注目したいと思います。このパンフレットの編集者たちの自由は、絶対に際限のないものではないために疑うことは出来ません。例えば尊敬の念がなくて宗教的意見を話すことは出来ませんし、反対に尊敬の念がなくても大物財界人とか流行の製作者のことを話すことは出来るでしょう。でも私が思考の全てを言うために、ここで毎日書いている〈プロポ〉を、そのパンフレットに載せることは、私が望んでも出来ないだろうと私は確信しています。

ここで私が思考することを、このパンフレットの記事として、私が考えているのと同じ様に際限なく自由に書けるのでしょうか。それは書けません。誰も私に忠告しないのは本当です。誰も私に変えろとか、穏やかに書けとか言いません。何故でしょうか。まさしく私は自分自身で忠告しているからです。私の手本は自分自身です。私には用心もなく書き付ける警句があります。予め分かっていたり説明しようとすることと別のことがそこに書かれます。嘗ては前々日に書いたものを和らげたり訂正したりしました。用心して書くということは、レトリックを使用したり、人を説得する技術であったりします。それらは集団としての見解に留意したり、出資者の機嫌を取るのが目的なのではないでしょうか。私には分かりません。もしもお望みなら、全てが同じであり、その意味では読者を非常に不快にさせるのは金銭についての反響だろうと思います。

しみったれで下品で卑劣な関心事で、へえ！と言われることでしょう。それらを書いているのは言葉です。あるが儘に物事を理解しなければなりません。何時も同意され、反対されないために人はものを書くのではありません。そうです。読む人々を傷付けたり怒らせるために書くのでもなく、あるいは別の言葉で言うなら、破産状態の新聞社の社長を助けるためでもありません。それらの中間に位置するのが大切で、多少は機嫌を取ったり衝突することも大切で、要するに束縛の中にあっても自由に振る舞うことが重要で、人の心を自由にみ、物事や人々について自由に表すことが重要で、空想した自由ではありません。困難もなく現実にあらゆる行動が取られますし、個人的に自由に空想する人もいるでしょう。そんな人は最早自分に慎重でないと言えますし、判断力を考えることもありません。最高を目指すこともありません。大袈裟な言い方をして、ぶつぶつ文句ばかり言います。

私としては、人間は何時も自由を手に入れる術を知っていると信じますし、そのことだけは信じます。そして、勇気に慎重さを付け加えて、それに手に入れ征服することになるでしょう。しかし、社会主義者に社会主義を大袈裟に言ってたたき込むことや、シヨン運動家にシヨン運動をたたき込むことは、表面的な上辺だけの自由であって、実際は奴隷です。

（一九〇九年十二月十七日）

（１）シヨン運動は、フランスのジャーナリストで政治家のマルク・サンニエ（一八七三～一九五〇）が指導した社会主義的カトリックの運動で、平和と人種主義反対のために闘いました。

百二十三　エスペラント語、イドー語　（ESPRANTO.IDO）

今でもエスペラント主義者はいるのでしょうか。エスペラント語はちゃんぽん語として消え、闇の王国ではイドー語が後継語となってより単純で論理的な言葉になっていると思っている人が言うのを、私はそんなにも昔でない時に聞いたことがあります。それ故にそれは教会分離のようなものでしかありません。そして、イドー語主義者は分離した小グループで、重要でないのでしょうか。直ぐに回答出来ない重大な問題です。エスペラント主義者はあなたに言うでしょう。「イドー語は、二、三人の数学者とか文法学者の気まぐれでしかない」。しかし、イドー語主義者は独断的に自分は最早エスペラント主義者ではないと言うことでしょう。確かに二つの宗教のうち一つを実践しようとするなら、一方しか期待しないで他方を抹殺しようとします。

知性的情熱には何か恐ろしいものがあります。それらは高潔で寛大な狂気です。私は高い教養を持った男と知り合いになりましたが、彼は立派な地位に就くことが出来ても、トップの地位に就くことはありませんでした。しかし、彼は数学の世界ではトップクラスの人です。私が知る限り、この人は恋愛や吝嗇や野心を避けていました。しかし、彼にも不足しているものがありました。彼はエスペラント語を習っていました。恐らく猛勉強をしたのでしょう。大変早く習得して、新しく身に付けた言葉の実力で周囲の人々をびっくりさせました。兎に角、何に使うかも分からないで、情熱だけでエスペラント語の道へ飛び込んだのは事実です。それまで些か単調だった彼の人生は、それから再び燃えだして刺激あるものになりました。一年後に彼の将来も見えてきました。最早、彼にはエスペラント語しかありませんでした。エスペラント語へ翻訳することしか考えませんでした。彼は翻訳のことしか考えませんでした。例えばトランプ遊びのバカラをやるように夢中になりました。この情熱によって改宗を余儀なくさせられました。何故ならエスペラント語というゲームを楽しむことしか出来なくなっていたからです。そこから宣教も怒りも独裁主義も生まれました。そこからイドー語が出てきて、同じ激しい活動によって、イドー語からプログレッソ語とかラテン語を改良したペルフェクト語とかいうものが出てきます。何時も追放が伴います。その後で主任司祭が宗教に執着して、人々はびっくりさせられます。エスペラント語をやることによって人間が全滅するしかないと私が考えるとするなら、大空から私たちを落とすこの新しい言葉の文法を私は憎むことになるでしょう。恰もフランス語には知るべきことや説明すべきことが沢山なかったかの如くで、エスペラント語という愚かな言葉で代数のように翻訳しているのです。

エスペラント語、イドー語、比例代表制、それらは四十歳頃になった人間の隙をうかがう狂気であるとしか私は理解出来ません。それらの力は、本当の問題や進歩を曲げて仕舞います。一つの言葉を完全に覚えても、事物による広大な帝国をもっとよく知ることはないでしょう。選挙の予想を完全に出来たとしても、選挙の進歩や精神の解放とは何の関係も無いでしょう。全く反対のことでも言うことは出来るのです。

（一九一〇年五月十七日）

百二十四　スゼットとデデ　（SUZETTE ET DD）

スゼットは天使のように美しいのですが、彼女が気に入ったことをやる時は悪魔よりも酷くなります。デデは率直な考えを持った小さな農民です。この少女と少年は、今年もバカンスに入っています。家族は喜んでいます。スゼットは乱暴になりますが、デデは礼儀正しくなります。要するにコサック兵のような二人は、その地方を一キロメートル四方程を自分のものにしているのです。

傾いた林檎の木があり、体操をするのに好都合でしたが、下の方には小麦が実っていました。或る日、私が緑色の小径に沿って行った時に、そこで二人のコサック兵を見付けました。二人とも林檎の木に登ったり飛びついたりしていて、実った小麦を気にすることはありません。子供たちは私を少しも恐れませんし、私は彼らに対して何の権威もありません。血縁がある訳ではありませんし、法律に書かれている訳でもありませんが、私には雄弁が残されていました。

私はそこで小麦について話をしました。どんな風に大地を耕して種を蒔き、利益を上げるかです。大地の中で眠っていた種は、温かい雨で膨らんで太陽に向かって大きくなります。その時、太陽光線が緑色の葉に当たり、大気中の炭素が毎日少しずつ取られていきます。この炭素は水と結合して茎に行き、藁になったり、食べると美味しくさせ、燃やすにも好都合です。そして最後には太陽によって何度も煮出した極上のスープとなって茎の先に花の房を作り、穂が出ます。そこの農夫はとうとう最後には報われます。小麦粉を作り、パンやパン切れにして食べるのに美味しいものにしますが、単に動物のためだけではなく、人間のためにも作るのです。太陽が成熟させるこれらの貴重な財産は見張る必要もありません、世界中の平原で小麦が大切にされていますが、更に小さな子供はそれ以上に大切にされています。何故なら労働の価値がどのくらいか皆知っているからです。それ以上に運動も大切で、何もやることがなかった時は歩いたり、パン切れになる小麦に飛び掛かることも大変自然でした。

スゼットには跳躍や笑い声が無駄ではありませんでした。しかし、デデは楽しむだけです、道端に取り残されても恥ずべきことではないのですが、注意深く本当の農夫になって小麦を見ていました。恐らく彼は、資産家や労働や周囲の人々が朝から晩まで考えていることの全てについての最初の観念をその日に手に入れたのです。その間のスゼットは、ある時は甘えて、又ある時は脅されたように遊びに夢中でしたが、大地を見てびっくりしました。喜びや義務感とは違う大きな葛藤があり、そんなにも長い時間考えないで、ある活動を行い、一つの考えを持ちます。スゼットが叫んだ時、そして彼女がデデの方へ足を向けて行った時、英雄的な行為が生まれていました。彼は座っています。遊びは終わりです。そして最高に美しい勝利を私は自慢することが出来ます。

スゼットから私が見たものは何でしょうか。情熱から理性への何という挑戦であろう。驚きと熱狂と希望があります。彼女も、この時の新しい力を判断するでしょう。女性としての未来を解読することでしょう。彼女は何年も要求することでしょう。「そうです、もしも私が本当に女性らしくなったら、そしてあなたが本当の男性らしくなったら、私が意地悪な屁理屈屋だと見ます。そして、あなた自身は戯言を言うのでしょう」。全ては不満げな目つきの中にあります。そしてこれ以上彼女はこのことを考えません。子供たちを統治するのは容易です。

（一九一〇年一月一日）

百二十五　（男と女の歴史）

女が産褥にある家の中では、男は何と小さい存在であると感じることでしょうか。スターン（１）が指摘していることです。それは本当の性的関係と家の管理全体の本質的な原則を申し分なく明らかにしています。

女は本来支配されています。女は習慣に従って生活しますが、この習慣が既に法律なのです。それには料理の作り方がありますし、考える方法もあります。女には発明することが一番良い方法ではなくて、やり直すことが一番良い方法なのです。女の作品とは子供であり、最も良い子はあらゆる子供と上手くやることです。命令、永続性、平静、保存及び缶詰にすることが女の作品のようなものです。男とは何でしょうか。発明家、夢想家、詩人、怠け者です。

従って人間とは違う動物の社会では、雄は少なくとも生殖に必要な期間は大目に見られているのが分かります。そして、仲間から追い出されて何か愛の歌でも創って悲惨な死を遂げるのです。人間の男も同じだろうと私は考えますが、寧ろ女の方が何世紀もの間、歴史という事実の前では良くあったことだと考えます。伝説のアマゾネスは、自然の儘の社会における最後の名残でした。

しかし、人間に力を与えたこの革命は、如何にして起こったのでしょうか。人々は門から門へ歌いながら行くことで、少しでも長く生きる手段を手に入れたのだと私は想像します。何故なら人々はそうすることで、子供や女たちを楽しませたからです。人間が蜜蜂の巣のように大勢働いている間に、彼らは言葉や遊びや暇つぶしのあらゆる方法を発明しました。こうして人間は知性的になり、数字や顔つきに気を付けるようになったのです。蟻たちが食糧を蓄えている間に、葉巻が遊びとして発明され、その次に道具や罠や武器が発明されました。この様にして〈言論〉と〈科学〉という力のある二人の王が生まれ、今日の世界を支配しています。アマゾネスたちが歌と言論を過度に我慢していたと気付いた時は遅すぎました。彼女たちは繊細な心の持ち主になって、愛する人に尽くし、ギターの弾き手になるのが辛いことを知りました。詩歌、音楽、科学、産業、それらは男の歴史です。弓や楯が発明されると、王が生まれました。毎日のパンが必要とされ、一年中四季を通じて恋愛していました。五千年の間、その様な荒々しい状態の中で私たちは生活してきました。贅沢、芸術、詩歌、戦争、産業、科学、それら全てが革命的制度を創り、不変状態は一瞬の如くです。しかし、解体を受け入れたところに勝利はありませんでした。感情が取り残されてあるだけでした。もしも酒に酔っているのが短くなかったなら、女は自分の主人が好きになることは決してありません。彼女は科学や機械が嫌いですし、男がカフェへ行き、カード遊びをして恋愛や戦争の話をしている間に、女は戦時態勢にあってもそれでもジャムの入った壺を並べている方が好きなのです。

（一九〇八年七月二三日）

（１）ローレンス・スターン（一七一三〜六八）は英国の作家で、『トリストラム・シャンディ』第１巻〜第９巻未完（一七六〇〜六七）、『センチメンタル・ジャーニー』（一七六八）の小説があり、夏目漱石に影響を与えたと言われている。

百二十六　一夫一婦制　（MONOGAMIE）

人は々、恰も〈神〉の存在を信じているかの如く、〈神〉に反抗します。悲嘆に暮れた奴隷が〈神〉との別れについて考えるのは、〈神〉は残酷で嫉妬深く、愛の喜びを規制しているからで、〈神〉が激しく拒絶する以上、自由は残ります。その様に考えるのは、実際に道徳は〈神〉が齎すものと信じるからです。それは〈神〉を肯定すると同時に否定することです。しかし、もしも反対に〈神〉の命令は人間が作り出したものと理解したなら、その時は全ての道徳上の規則が存在しているのはもっともなことであると認識すべきです。

最も多様な社会において恋愛の快楽は、何時もどうにかして規制されているのが分かります。快楽の上だけに構築される社会機構というものは認識されません。そして快楽は特殊であり、恰も人間にはそれ以上に大きな敵はいなかったかの如くに何時もここで不信や疑念を検討することが重要です。

全て自然であることが良いと人が言う時、何か非常に曖昧であると言われます。情熱は自然なものです。情熱を抑えること、科学や平和や正義であるための条件も自然なものです。選択しなければなりません。もしも人間が動物として生きるのであるなら、人間としての機能を弱らせることになるでしょう。例えば抑制のない遊蕩人生は忽ち衰弱し、明晰でなくぼんやりとして、注意力もなく、力強くもない精神状態に陥ります。私が見る処、トルコ人の特徴的な性格の多くは一夫多妻制にその解決を見出していますが、それは明らかに女性の風習を規定しているものです。それに反して男性は色々な快楽や誘惑を沢山手に入れて、疲労し愚かになるばかりです。

一夫一婦制でなければならない理由は、健康上のためであると同時に、道徳上のためでもあります。だんだんと快楽を抑えるようになった者は、恋愛から理性的な友情へ、快楽から英知へ、避けることが出来ない苦難を通して導くに違いなく、最後には名誉を手に入れます。これは社会性のために先ず最初に必要なものです。一人ひとり
がそこで平和に生きることと平和を愛することを学ぶに違いありません。つまり物事を理解して従い、最後に情熱を鎮めることが公的な生活を準備することであり、同時に避けられない老化を準備することでもあります。従って、結婚を快楽の結果と見做す者たちは病気になり、病気を移すことになるでしょう。その考えで一つの社会に入ることは理性的でなく、もしもその社会に専ら名誉や快い気持ちがなければ、抜け出すことでしょう。反対に、その社会は合理的に何時も辛い教育が行われなければなりませんし、それ故に先ず〈貞節〉を指導する思想が与えられなければなりません。これと同じ考えは、やはり結婚に相応しく役立つものです。

（一九一三年一月十三日）

百二十七　結婚　（MARIAGE）

結婚が有利であることをあらゆる論拠を挙げて示して、内縁関係に反対する時、何時も解決されないことは、或る人々から内縁関係という素晴らしい制度が激しく責められて、その支持者たちが困って仕舞うことが何故殆どであるかということです。結婚は恐らく機能と見做されており、そして々その結果であり、情熱を鎮めることになります。結婚は薬であり、特に少しばかり病気が好きな時でも、殆どの人は薬が好きではありません。

胸の中での恋愛の最初のときめきは、何時も快いものです。単純に物事を考えて下さい、それでもあなたの望みと同じように大きくなって行くでしょう。それは体の中で準備されているのであって、人生が二倍になるように創造が生まれます。詩人たちは何時も恋愛の最初を、春の最初の目覚めに譬えます。何故なら、この譬えは全くその通りであるからです。そこには幸福感が溢れていて、希望があり、殆ど何時も実現出来るように感じます。希望を持つこととは何でしょうか。それは未来の喜びを考えることです。私たちは希望が将来やって来ると考えるよりも、寧ろ現在の幸福として判断しています。

恋愛は如何なる情熱であっても、それ故に期待と希望に生きています。確かにこれらの情熱に疑問がない訳ではありません。しかし、手を使って喜びを手に入れる時は、それでも何らかの懐疑は愛されると言わねばなりません。女性たちはそのことを教わったことがありませんが、大変に良く知っています。烈しい情熱で自分自身が逆上しない限り、女性たちは春の気持ちを持続させる方法を大変良く身に付けています。詩人や小説家たちも、その時は才能が枯渇することがありません。何よりも力があるのが恋愛であり、それは長い試練であり、婦人に何時も尽くす騎士であり、あらゆる誘惑を使って行われますが、それが人間性であり真実です。そのことに条件が付くと、愛人たちの間に何かの障害が生まれ、恋人たちは何時も願わなければなりませんでした。

ところで最善の願いを持ったこの魔術師の希望が、人間性の力を大きくして行き、人生というものを意義あるものにすることが出来るのですが、狂人の願いは実現すると自分自身を殺すことになります。かくして、期待として残したいためのものであっても、大変に賢明な節度のある希望というのは不可能です。恋愛は、それが可能になると陥穽に落ち込みます。結婚は、演劇作品や小説の結末です。燃えるような夏は、直ぐに花々を萎れさせました。次にやって来るのは秋の実りです。もしも恋愛を残して置きたいのなら、どんなことがあっても恋愛を友情にしなければなりません。そして、死んで灰になっても辛い気持ちがなく、気兼ねもなく行動できる二人の間にある友情は、何と気高いことでしょう。多くの場合、英知は味気ないように感じます。平安は退屈にさせます。不安な気持ちを長い間楽しんできた心は、安全だと分かると酷く苛立ちます。誰でも相手に自分の欲望を説明したいと思います。もしも彼らがお互いに退屈して時間が有り余っていたなら、離婚が進行中なのです。

（一九〇八年二月七日）

百二十八　中国紅茶夫人　（MADAME SOU-CHONG）

中国人男性と結婚した若い娘の輝くような冒険が本になって出版されたのは大変に良いことです。その若い娘は美しく知性的でした。彼女はこの世の女王になっていました。湖の白鳥のように航跡をそこに描きました。但し、彼女は殆どお金を持っていませんでしたので、自分自身で愛することよりも、寧ろ愛して貰う方を考えていました。要するに彼女は、自分を売るのに最高の値段を付けていたのです。しかし、それはこの世の中でよくあるようなことではありません。

中国人男性は外交官で、彼女の恋人になりました。彼は大変なお金持ちでしたので、自由に買物が出来ました。私が言いたいのは、彼は崇拝され、車に乗り、服を着飾り、おしゃれをするのも公証人立会いの下に、される儘だったことです。彼女は中国紅茶の女王か何かになったのであり、ヨーロッパで最も輝かしい庭園を散歩する名誉を手に入れました。

全部で値段が幾らか、そして彼女が何にお金を使ったのか固執するのは止めましょう。社交界に出入りする女性はそのことを余り考えませんし、決して話しもしません。しかも文明人という者がそんな時は立ち聞きしているのは本当で、彼女の随員たちが遠く離れることはありません。文明化された夫が少なくとも一日に一度は手錠をして首に縄を付けられて出頭しなければならない女性裁判所の権限で、弱き女性は保護されていると感じます。私たちは中国紅茶王子と呼んでいるのですが、その中国紅茶王子は自由にやらせて女外交官の策略を知ったのだと見当を付けて下さい。誰も彼の考えを知ることが出来ませんでした。しかし、お祭り騒ぎがだんだんと北京との距離を縮めて行くにつれて、目尻のつり上がった彼の両眼はだんだんと笑っていきました。

彼らがそうなった時、世論の力は遠く及ばず、女に尽くす男でもなくなり、モリエールの戯曲『人間嫌い』の若き未亡人セリメーヌの扇が支配するサロンからも遠くなり、哀れな女王はその時自分が奴隷になったのを知りました。彼女は快楽のための機械のように取り扱われて閉じ込められ、叩かれました。彼女は福祉施設の娘たちよりも悲惨でした、其処の福祉施設では時々酒に酔った水夫たちが来て、娘たちは自分の栄華や貧困を語ります。何か月もの拷問の後に、彼女は離婚して自由になりました。

そうです。この打ち明け話は語るのに意義があります。勿論、若い娘たちはその意味を良く理解しなければなりません。何故なら夫に追い出された時は、中国人や北京を避けて生きるのは難しくなくなるからです。しかし、結婚時代の蝋燭の火が消されれば、結婚時代とそれに続く日々は不愉快なものになります。女王であった後に奴隷でなければならないのですから。セリメーヌなら誰でも言うことでしょう、「サロンでは、最も不愉快な徴が作られます。敬意が払われないか、あるいはお金をかけることです。しかし、蝋燭は消され、私たちの支配は終わりました」。その時は、叫び声を上げて後ろ脚を蹴って走り出さないで下さい。太った下品な中年女に突然になったセリメーヌたちは、皆あなたの耳に囁くことでしょう。「この時刻は皆物音を立てずに静かにしています。それでその家は上手くいくのですよ、あなた！」。

（一九〇八年六月七日）

百二十九　（道具と観念）

芸術家は言いました。「どうして、敢えて子供っぽく振る舞おうとするのだろうか。自分の体質や性格の二面性を世間に見せて、そういう自分に誰が満足するのだろうか。私は不幸な男ではないし、人生を愛している。しかし、結局のところ別の自分自身が他にいて、同じ生涯を繰り返したいとは思わない。結局それは超人であるための悲しい仕事となり、考え過ぎたり、人が行った愚かさや行ったかもしれない愚かさを増やすことになるのだ。自己批判し過ぎだ。自分自身の弱さをよく知って、人の意見に過敏にならないようにすることである。人には余りに沢山の躊躇いがある。意識が神経質になり過ぎ、動物と同じ様な生活になる。それでもそれで上手く行くと告白せざるを得ないのだ。知性だけでは決して行動しない。私は農民の頑固さに導かれたが、息子たちは何になるのだろうか。都会人の息子たちはお喋りで、心が擦り切れている。私はもっと良いものを用意している。息子たちは馬鹿でなく、狂人でもなく、聴覚障害者でもなく、聾者でもないと誰が保証してくれるのだろうか。確かに、彼らが生まれれば育てられるだろう。しかし、子供でいたいと望むなら、私は何もしないだろう」。

モラリストは言いました。「子供っぽさを認めないならば、私は何もしないでしょう。えっ、何だって。あなたは理性と法律を愛していても、未来を作るには不十分ではないのですか。えっ、何だって。あなたは自分の裡に隠された力を感じていても、この短い人生の中で自分に納得する手段を見出さず小石になるか、最後には埃になる前に監獄から解放されるようにならないのですか。えっ、何だって。あなたは優しい瞳に青春と勇気を取り戻し、泉のような新鮮さと透明さを取り戻し、あなたが飲んできた有益でためになる水源を涸らしに行くのですか。子供っぽさをなくすこととは、子供自身を殺すことであり、妻を殺すことであり、人間性を裏切ることです」。

賢者は言いました。「この論争には終わりがありません。何故なら、単純に可能性のことばかり言っているからです。データが不足しています。理性が働けば、望んだことは何でも証明されるでしょう。オーギュスト・コントは、それらの多くを形而上学と呼びましたが、別な言い方をすれば空虚であり、抽象であり、否定好きな人になります。知性は大変に早く、そして大変に高く飛び掛かりますが、肉体は途中で置いてきぼりです。ここには進歩がありません。私が望むのはもっと重みがあって、大地に根を下ろして、両眼と両手を使って現実のものとぴったりと結びついた知性であり、道具として使用するものと観念とを分離しません。正義は、堀や壁のように徐々に作られます。もしも資料もデータもなく議論して、それが中身のない瞑想であっても、あなたの本能や母性本能に勝ったなら、ユマニテ（人間性）には子供っぽさを必要としないことが証明されることになります。もっと他のことを教えなさい。好き放題に話しなさい。大変高尚な話になるのでしょう。しかし、もしも仕事をしている者が単に頭を上げて、鑿よりも少しばかり先を見たならば、それで十分なのです」。

（一九〇九年一月十日）

百三十　経済革命 (RVOLUSION CONOMIQUE)

共通認識に抵抗しなければなりません。最初の観念が提示しているものは間違っている、と私は々言ってきました。例えば、今年の春の日食で確認出来たように、太陽は月よりもそれ程大きくありません。この例は、最初に明白と思われたことでも疑ってみなければならないことがある、と極めて簡単に良く分かる例です。そして、自分の考えによって思考することとは、頭で考えるとき常に最初の瞬間にノン（否）と否定することであり、所謂、熟慮の時を自分に与えるために、明白と思われることでも両眼を閉じて見ないことです。そこから分かることは、思考する者は頑固で否定好きな人間だと容易に見做せることです。

自分から進んで否定するという意味からも、彼らは厄介な人間でもあります。最初は別に理由がある訳ではありませんが、学説に従順な羊たちは皆が一斉に同じ鳴き声を出し始め、上手に同意することばかり気にかけています。しかし、注意しなければなりません。正しい思考とは健康的な音楽家と同じものではありません。人間は音楽家に生まれ、思考家になるのです。彼はそこで今まで信じてきたものを火刑、別な言葉でいうなら体刑のようなものを受けるのですが、何時も音楽があります。

ここにそれが進展した例として良く知られたものがあります。それは革命ですが、政治的なものではなくて、経済的なものとなるでしょう。その点については全ての人、或いは殆ど全ての人が意見を一致しているように思います。しかしながら私は、頑固な驢馬のように頭を横に振って疑います。この〈経済革命〉という言葉に、一つだけの意味を与える訳にはいきません。何故でしょうか。〈経済力〉の逆喩を他に把握出来ないからです。この言葉が表現しているものは、生産力というものしか私は理解出来ません。それは事物について行われるもので、人間についてではありません。少ない労働力で多くの生産を生む者に祝福あれ。沢山働く者にも祝福あれ。他人の力でなく、自分の力で働き、休憩を厭う勤勉な性格からくる不安から働いて仕舞う者に祝福あれ。それというのも、それらの生産は称賛すべきものであるからです。これは決して大袈裟に言っているのではありません。

例えば、もしも家族の中に若い技術者がいて、時計や階段や床や錠や箒や包丁などのどんな物でも修理するのが好きであれば、彼は本当に貴重であり皆の役に立つ人でしょう。不正が起きるとすれば、他の処に原因があると思います。不正は、人間の上に人間の力が及ぶ結果であると私には思えます。それは強制する力であったり、妨げる力であったりします。ところがこの力は本来、政治的であり、最早、純粋で単純な個人的な暴力ではありません。不正の始まりは分かり易いものです。火災、水害、山賊行為、病人に対しては秩序と協調がなければなりません。そのときは治安機能が発揮されますが、権力や規律や道徳心は、治安機能が発揮出来るようになればなる程、余儀なくされる活動を直ぐに悪用するようになってきます。そして、この結果に抵抗することは正に政治的です。一人ひとり誰もがそのことを行為しなければなりません。例えば金持ちは、政治力が没収されてなくなるようになっていくことを再認識させられます。実際に、もしも人民が主権者であったならば、そして、もしそのリーダーが本当に人民の代理人であったならば、世界中の金持ちというものは何にサービスするのでしょうか。そして、自然法のようなものである経済的関係が、政治的権力の介入によってその均衡が崩れて、制御が利かなくなることも誰も言わないのでしょうか。けれどもそこから大急ぎで推断することは、経済領域についての闘いを行わなければならないということです。それは狩猟家という人を噛むのではなくて、猪槍という事物を噛むような行為です。

（一九一二年十月十九日）

一ノルマンディー人のプロポ（中）
http://p.booklog.jp/book/56228

著者: アラン（翻訳：高村昌憲）

翻訳者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/56228

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/56228

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）

運営会社：株式会社ブクログ